

京都府埋蔵文化財情報

第86号

共同研究 古墳時代中期における製塩土器研究の現状と課題 -----	小池 寛 --	1
平成14年度発掘調査略報 -----		12
8. 大成古墳群・イリ遺跡		
9. 山田黒田遺跡		
10. 野条遺跡		
11. 内里八丁遺跡第5次		
12. 東原遺跡		
13. 二又遺跡第2次		
14. 三山木遺跡第5次		
研究ノート 無垢の喪失		
—新しい前・中期旧石器時代の研究のために— -----	中川 和哉 --	22
府内遺跡紹介 93. 塩谷古墳群 -----		28
長岡京跡調査だより・83 -----		30
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧 -----		32
センターの動向 -----		33
受贈図書一覧 -----		35

2002年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

古墳時代中期における製塩土器研究の現状と課題

小池 寛

1. はじめに

弥生時代から古墳時代にかけての土器製塩に関する研究は、香川県喜兵衛島遺跡群に代表される備讃瀬戸地域での考古学的調査によって、その礎を成したことは広く知られている。その後、大阪湾南岸一帯および西庄遺跡などの和歌山県紀淡海峡付近での発掘調査が増加し、備讃瀬戸地域の製塩土器とは異なった様相の土器群が認識された。また、近年、兵庫県神戸市域での古墳時代の集落跡調査によって、先に述べた備讃瀬戸地域、大阪湾南岸一帯、紀淡海峡付近で確認される製塩土器とは様相が異なる土器群が確認されるようになり、当該地域においても未確認の製塩遺跡の存在が予想されるに到っている。

一方、消費地では、奈良県布留遺跡などの内陸部に所在する古墳時代の集落跡からも多量の製塩土器が出土することがかねてから知られていた。また、古代の牧として機能していた四條畷地域の古墳時代集落からも大量の製塩土器が出土しており、馬の飼育との関係でこれらの製塩土器を解釈する必要性が指摘された。これらの調査研究から土器製塩が、必ずしも製塩遺跡のみで行われたのではなく、牧や工房跡などのような多量に塩の摂取が必要な集落では、集落内で焼き塩工程が行われていた可能性も指摘されている。

本稿は、以上の経緯を前提として、製塩遺跡および内陸部の集落跡から出土する製塩土器を概観するとともに、古墳時代中期後半に丸底型式の製塩土器が、急激に小型化する要因についてふれておきたい。また、製塩土器の搬入元と集落自体の規模や居住施設の違いがどのように関連するかについてもみておきたい。

2. 製塩遺跡および集落遺跡の製塩土器

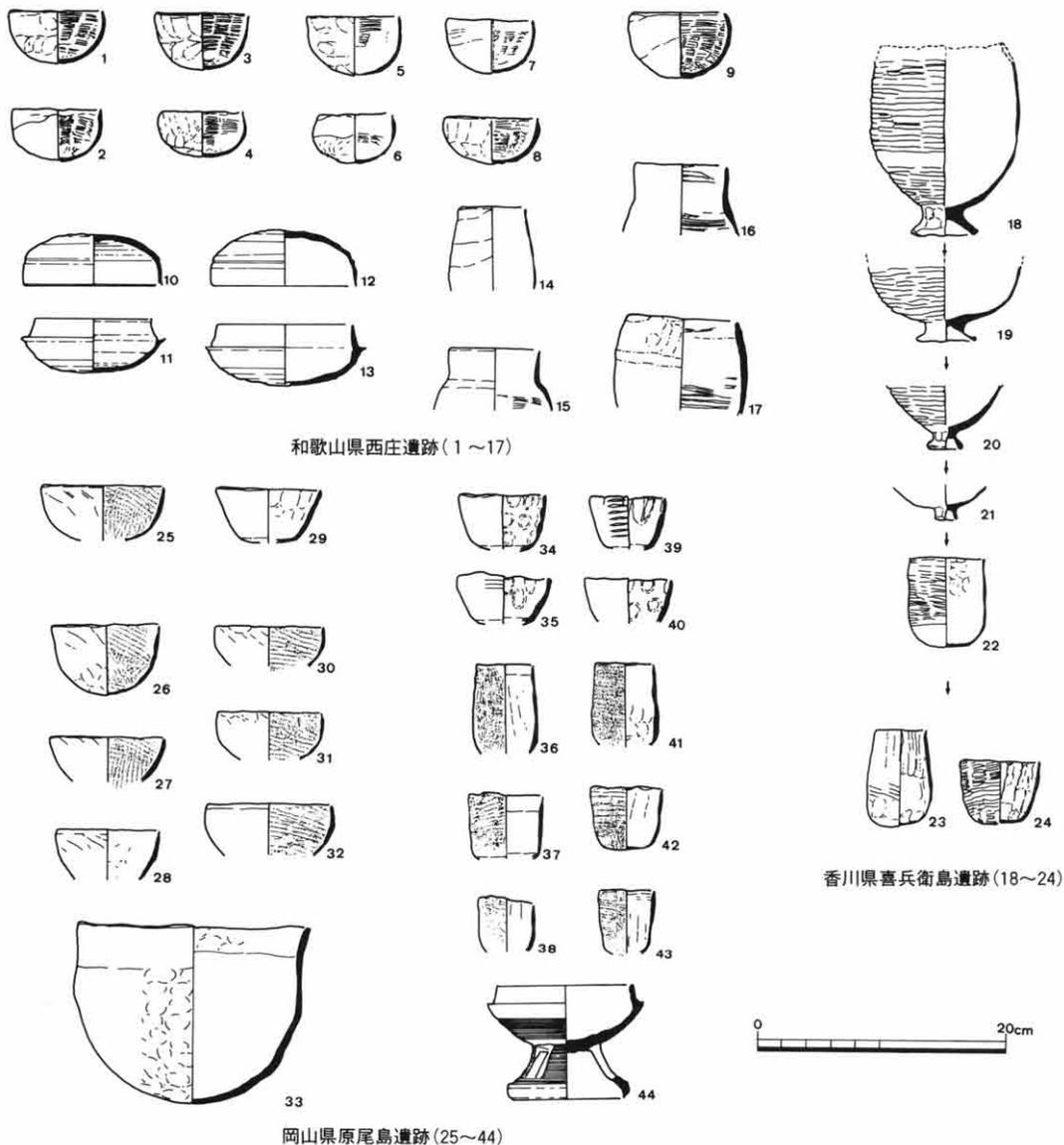
まず、製塩遺跡出土の製塩土器について、実見したわずかな資料についてみておきたい。

(1) 和歌山県和歌山市西庄遺跡^(注1) 西庄遺跡は、紀淡海峡一帯に所在する製塩遺跡群の一遺跡であり、布留併行期には土器製塩が開始され、最盛期は陶邑編年TK23型式併行期から同MT15型式併行期である。丸底型式の製塩土器は大量に出土しており、3年間の調査で整理箱に1,000箱を数えている。製塩土器以外には、朝鮮半島の陶質土器や大阪府陶邑古窯跡群産の須恵器などが出土している。西庄遺跡周辺には、新羅製の金製勾玉が出土した車駕之古址古墳や馬甲や馬冑が出土した大谷古墳などが所在しており、西庄遺跡との関連も想起される。

西庄遺跡からは、蛸壺形の丸底Ⅰ式(第1図14)と椀形の丸底Ⅱ式(第1図1～9)が大半を占め、

甕形の製塩土器(第1図15・16)なども出土している。丸底Ⅰ式に分類できる土器にも形態差があり、時期差などの要因が想定できる。焼成は、度重なる加熱により、還元焰焼成のように硬質である。一方、丸底Ⅱ式の土器は、胎土に砂粒を含まず、色調は全体的に赤褐色を呈している。内面に白色の斑文を有する個体が散見できるが、これは、煮沸過程で生じた付着物と考えられ、他地域の製塩土器にはあまりみられない特徴である。器壁は約0.2~0.3cmを測り、外面には粘土接合痕と指ナデ痕が観察でき、内面には、基本的には貝殻条痕が見られる。

以上のように、西庄遺跡の製塩土器は、多くの特徴をもっており、消費地から出土する製塩土器内での識別は比較的容易である。なお、西庄遺跡における貝殻条痕は、貝殻を口縁部に対し平行にあてて回転させているが、後で述べる岡山県原尾島遺跡のそれは貝殻を口縁部に対して斜めにあて、中心から外方に向かってかきあげる手法上の違いがみられる。胎土とともに搬入元を特定するうえで重要な特徴である。



第1図 製塩土器集成(1)

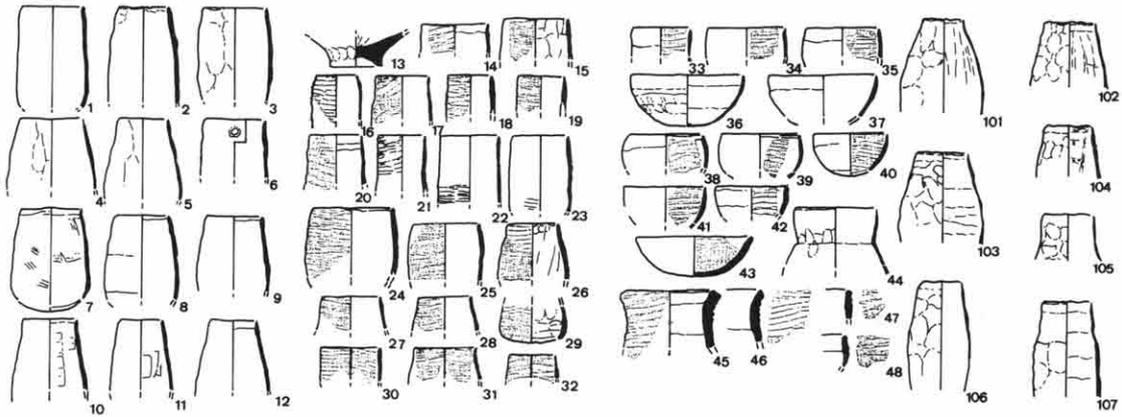
(2)香川県直島町喜兵衛島遺跡^(注2) 喜兵衛島遺跡は、古墳時代の師楽式土器研究の礎を成した遺跡であり、基本的な報告や論文が多く提示されている。一般的に弥生時代の脚台をもつ製塩土器は、古墳時代前期まで形態的に継承されるが、その過程において脚台が徐々に形骸化し、丸底に到る形態的变化が当該遺跡の報告書において考察されている。これについては、兵庫県引野遺跡において良好な事例が近年、確認されており、後述することとしたい。

喜兵衛島遺跡における古墳時代中期の製塩土器には、先に述べた西庄遺跡例と同じく、蛸壺形の丸底Ⅰ式と椀形の丸底Ⅱ式に分類できる。丸底Ⅰ式に分類できる土器の胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色である。焼成は、硬質であり、器壁は0.2～0.3cmを測る。外面には、平行タタキ目が観察でき、内面にはナデ痕が観察できる。一方、丸底Ⅱ式の土器の胎土にも砂粒を多く含み、色調も暗茶褐色である。焼成は、硬質であり、器壁は、0.3cm以上の個体が多い。外面には、平行タタキ目が観察でき、内面にはナデ痕が観察できる。これらの土器群は、色調が暗茶褐色ないしは暗赤褐色を呈しており、多くの砂粒を胎土に含んでいる特徴が特筆できる。

以上が、製塩遺跡における製塩土器の概観である。次に、消費地における製塩土器をみておきたい。なお、製塩遺跡である小島東遺跡は、他の出土遺物が極めて特異なこともあり、ここで概観しておきたい。

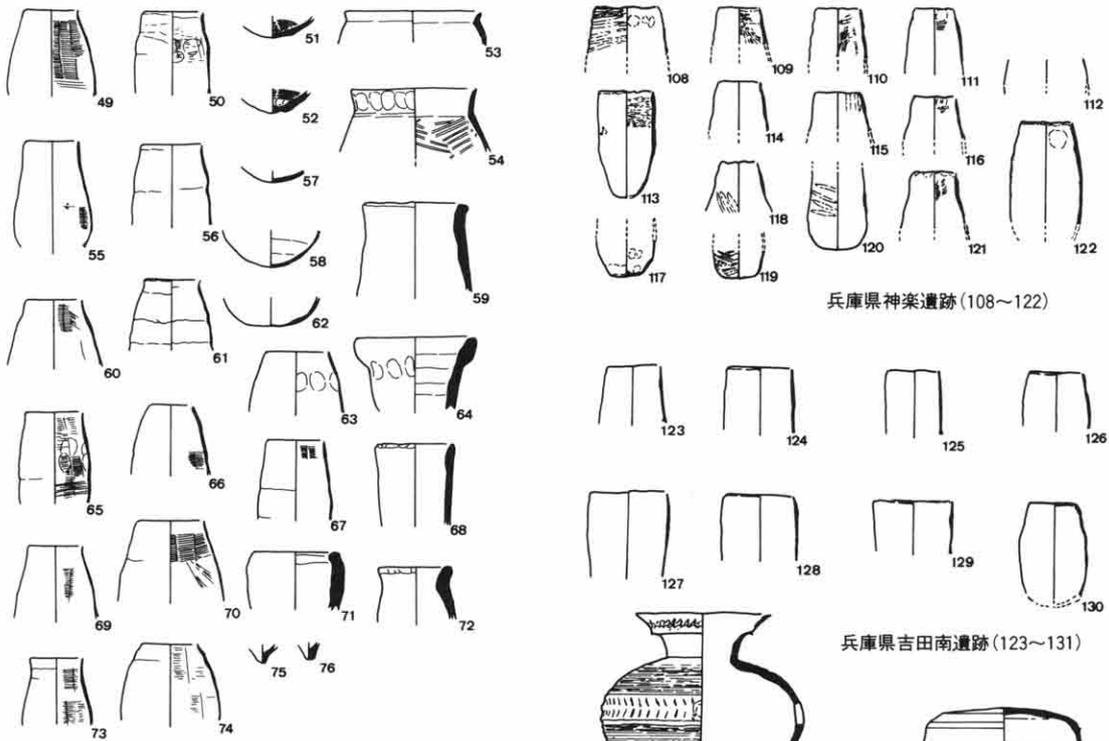
(1)岡山県岡山市原尾島遺跡^(注3) 出土した製塩土器は、外面をタタキで成形する一群(第1図37・38・42・43)、内外面をナデによって調整する一群(同28・34・40)、外面は未調整ながら内面には貝殻条痕が観察できる一群(同26・27・30～32)、外面はハケ目、内面はナデによって調整する一群(同25)に分類できる。内面に貝殻条痕が観察できる個体は、丸底Ⅱ式に限定されるが、他の調整痕は、両型式の土器に共通している。同33は、甕形の製塩土器であるが、濃縮海水を煮沸する容器と考えられる。なお、丸底Ⅱ式の製塩土器は、西庄遺跡のそれと近似する特徴をもっているが、器壁が厚く、胎土に砂粒を多く含む点、そして貝殻条痕の方向などに相違点がみられる。

(2)奈良県天理市布留遺跡^(注4) 布留遺跡は、古墳時代前期の古式土師器の標識遺跡として著名であるばかりでなく、特殊な円筒埴輪によって圍繞された祭場や近隣に石上神宮が位置するなど、物部氏と関係の深い遺跡として周知されている。製塩土器の出土量も膨大な点数を数える。第2図1～12は、わずかに石英粒を含み、色調は灰色を呈する丸底Ⅰ式に分類できる製塩土器である。焼成は硬質で、器壁は0.2～0.3cmを測る。基本的に内外面はナデ調整である。一方、同14～32は、外面に平行タタキ痕をもつ丸底Ⅰ式の製塩土器である。胎土に石英粒や長石粒を含み、赤褐色ないしは暗赤褐色の色調を呈している。焼成は硬質で、器壁は0.2～0.3cmを測る。外表面は平行タタキによって成形し、内面はナデ調整を施す。同36～42は、丸底Ⅱ式に分類できる一群である。胎土に砂粒を含まず、色調は赤褐色、硬質焼成で、器壁は0.2～0.3cmを測る。内面には貝殻条痕が観察できる。このように出土した製塩土器は、紀淡海峡付近や大阪湾沿岸、備讃瀬戸地域から搬入されたと考えられるが、広範な地域から製塩土器が搬入される要因には、布留遺跡が有力豪族の拠点であることと関係している。また、集落内から馬歯や馬骨などが多量に出土しており、



奈良県布留遺跡(1~48)

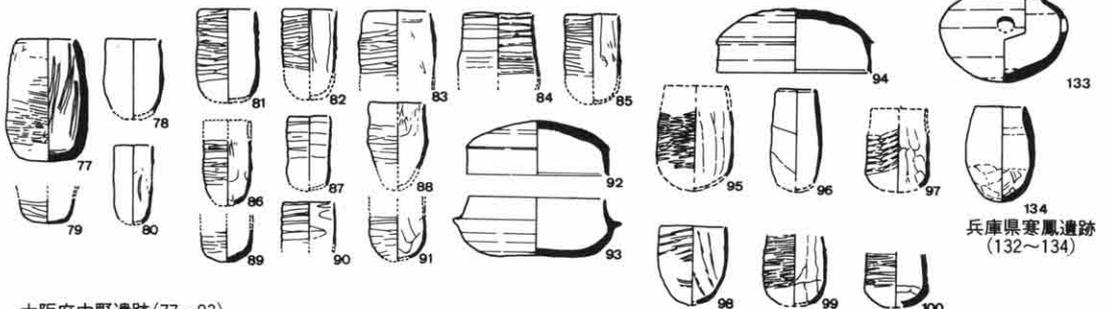
兵庫県白水遺跡(101~107)



大阪府小島東遺跡(49~76)

兵庫県神楽遺跡(108~122)

兵庫県吉田南遺跡(123~131)



大阪府中野遺跡(77~93)

大阪府森小路遺跡(94~100)

兵庫県寒鳳遺跡(132~134)



第2図 製塩土器集成(2)

馬の飼育が製塩土器の大量出土の背景にもあると考えられる。

(3)大阪府泉南郡小島東遺跡^(注5) 小島東遺跡は、遺跡の立地条件および製塩炉の検出により、製塩遺跡であることが確認されている。しかし、製塩土器以外に多量の滑石製品や鹿角製把縁装具、鍛冶関係の鞆羽口や鉄滓、銅鏃などが出土しており、単なる製塩遺跡とは認識できない要素をもっている。出土製塩土器の中で丸底Ⅰ式の胎土は堅緻で色調は淡灰黄色を呈する個体が大半である。焼成は硬質で器壁は0.2cmと薄く、内外面の調整はナデである。基本的な要素として西庄遺跡出土例に酷似している。なお、製塩土器以外の出土遺物は、一般的な集落においては確認できない遺物群であり、土器製塩を操業する背景には、畿内政権との結び付きを考える必要がある。

(4)大阪府四条畷市中野遺跡^(注6) 大阪府四条畷市には、東方に位置する生駒山から讃良川、清滝川、権現川の三河川が河内潟に流れ込んでおり、自然地形が良好な牧を形成している。馬の飼育を示唆する資料として、同市域から馬歯や馬骨の出土が多くみられ、また、奈良井遺跡では、殺馬儀礼を示す遺構などが確認されている。

四条畷市域から出土した製塩土器は、極めて多様であるが、外面に平行タタキ痕を有する丸底Ⅰ式の土器は、形態的特徴や胎土などから当該地から大阪湾岸一帯の近接した地域から搬入されたものと解釈されている。しかし、河内潟を通して大阪湾沿岸には容易に通行できることから、市域に点在する集落跡において土器製塩の焼き塩工程が行われたことが想定されている。出土製塩土器は、基本的には丸底Ⅰ式土器であり、外面に平行タタキを有する個体が大半である。胎土に砂粒を含み、暗灰色の色調を呈する個体が多い。焼成は硬質で、器壁は0.2～0.3cmである。同様な特徴を有する製塩土器が、布留遺跡や京都府森垣外遺跡などで出土している。

馬を飼育する際の飼料として、塩は不可欠な要素であることはすでに良く知られている。四條畷全域で飼育している馬全頭に塩を飼料として与えるには、相当量の塩の確保が必要である。そのため、安定した供給源を確保する必要がある。同市域内の葎屋北遺跡において狭小なグリッドから整理箱にして25箱の製塩土器が出土しており、当該地が製塩炉に隣接した地点に該当する可能性が高い。これらの大量の製塩土器の出土は、河内潟周辺でも特異であり、その出土の意義は、古墳時代中期の製塩を考える上で極めて重要な資料である。

四条畷市域は、河内潟に面していたことから、朝鮮半島から海路によって運搬された馬が、河内潟を経て四条畷付近に陸あげされ、集約的に飼育されていたと考えられている。また、その後、牧内で馬の繁殖がなされ、本格的な軍馬の飼育がなされたと考えられる。その飼育にあたっては、膨大な量の塩が必要となることから、多量の製塩土器が出土すると解釈されている。以上のことから、四条畷市域の牧は、畿内一帯に点在する中期集落での急速な馬の需要に対応するために、畿内政権によって整備されていったと考えられる。

(5)大阪府大阪市森小路遺跡^(注7) 森小路遺跡は、河内潟の北辺部に所在しており、古墳時代中期後半の集落跡が確認されている。製塩土器は丸底Ⅰ式が多く、胎土には砂粒を含み、色調は灰色を基調としている。一方、煤の付着した個体も散見でき、焼成は軟質な個体が多く、器壁は、0.2～0.3cmを測る。外面は平行タタキによって成形し、内面はナデで仕上げている。大阪湾岸沿

岸からの搬入であろう。

最後に神戸市域の古墳時代集落について、概観しておきたい。神戸市域出土の製塩土器は、市街化が著しいため調査の集中する地域に多く見られる傾向がある。一般的に広域な神戸市域は、吉田南遺跡、新方遺跡、白水遺跡、出会遺跡、玉津田中遺跡、寒鳳遺跡などが所在する西区域と松野遺跡、神楽遺跡、戎町遺跡、上沢遺跡、大開遺跡などが所在する長田、兵庫区域、そして、郡家遺跡、森北町遺跡、西岡本遺跡などが所在する灘区域の3区域に大別することができる。各集落の規模などは、調査面積が狭小なため判然としないが、一帯に集落跡が点在する状況である。

(6)兵庫^(注8)県神戸市白水遺跡 出土製塩土器には、丸底Ⅰ式に分類できる個体が出土している。丸底Ⅰ式の基本的な色調は、暗灰色ないしは灰色を呈しているが、外表面には煤が付着しており、淡黒褐色を呈する個体が多い。これは、胎土に多くの砂粒を含んでいることと密接な関係があり、砂粒によって生じた器表面の凸凹に炭素が付着したと考えられる。先に述べた四条畷市域の製塩土器にも煤が付着する個体が見られたが、胎土や色調以外の要素で搬入元を特定する際の有力な根拠になる。なお、土器製塩の煮沸工程では、燃料である木材をそのまま燃焼させるのではなく、炭などを利用し、多量の煙が生じない工夫がなされたと考えられる。しかし、焼き塩工程において煤が付着することも考えられることから、煤の有無は、一つの傾向として据えることはできるが絶対的な要素にはならないことも念頭におくべきである。

(7)兵庫^(注9)県神戸市神楽遺跡 製塩土器の大半は、丸底Ⅰ式であるが、外面に平行タタキ痕を有する個体とナデによって調整する個体に分類することができる。焼成は硬質で、器壁は0.2～0.3cmを測る。また、器形的には、丸底Ⅰ式に分類できるが、筒形を呈する特徴がある。なお、紀淡海峡付近の製塩土器に近似しているが、胎土は、それほど精緻ではないことから、遺跡の南方に広がる大阪湾岸付近からの搬入を想定できる。

(8)兵庫^(注10)県神戸市吉田南遺跡 製塩土器には、丸底Ⅰ式に分類できる個体が出土している。丸底Ⅰ式は、基本的な色調は暗灰色ないしは灰色を呈しているが、外表面には、煤が付着しており、淡黒褐色を呈する個体が多い。これは、神戸市域から出土する製塩土器に共通する特徴である。なお、須恵器には、陶邑古窯跡群産の製品が多く含まれていることが確認できた。

(9)兵庫^(注11)県神戸市寒鳳遺跡 寒鳳遺跡は、大量の滑石製模造品が出土するとともに、朝鮮半島の縄蓆文土器や朝鮮半島起源の大壁住居跡などが検出されている。集落全体の構造などは不明な点が多いが、渡来系技術者集団が参入した集落として認識できる。出土する製塩土器は、丸底Ⅰ式であり、筒形を呈する点に大きな特徴がある。胎土等の点で他の古墳時代中期の集落遺跡から出土する製塩土器に共通する要素も多く、周辺域に存在すると思しき未確認の製塩遺跡からの一括搬入を想起させる。

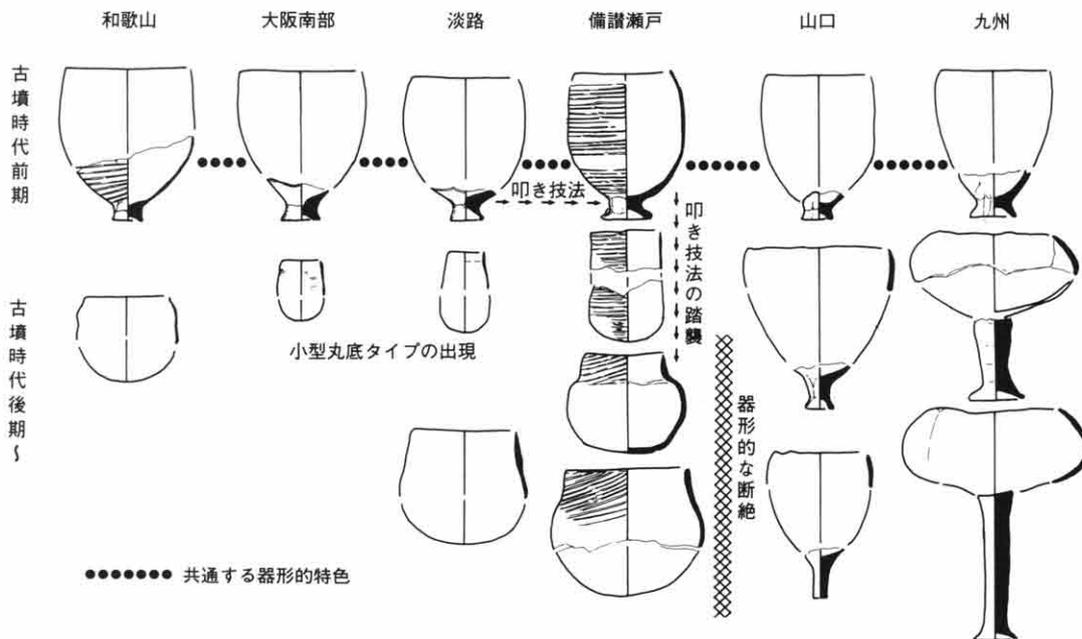
神戸市域の各遺跡から出土した製塩土器には、備讃瀬戸地域や紀淡海峡付近からの搬入は現時点では認識できず、神戸市域を含めた大阪湾岸からの搬入である可能性が高い。このことは、遠隔地に所在する製塩施設からの搬入より、より近郊に所在する製塩施設からの搬入が一般的であったことを示唆している。しかし、滑石原石の搬入元や須恵器の搬入元など、今後、多方面から

交易の実態を検討する必要がある。また、神戸市域に点在する各集落の消長の把握も急がれる。

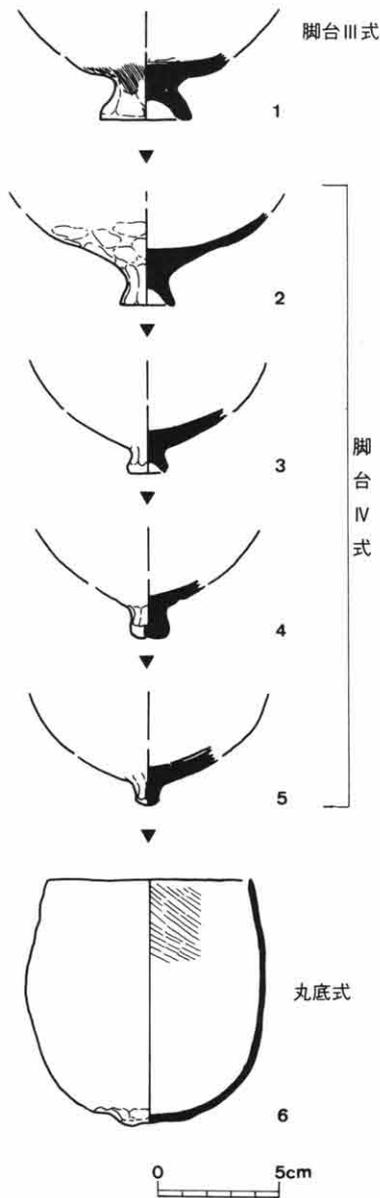
3. 丸底型式の製塩土器の出現をめぐって

一般的に弥生時代中期に備讃瀬戸地域で生成された土器製塩技術は、瀬戸内沿岸の地形的な要素などから急激に同地域において進展したと考えられる。それらの製塩技術は、瀬戸内海や大阪湾沿岸地域を経由し、弥生時代後期に周辺域に広く伝播した。一方、古墳時代前期には第3図のように製塩土器の器形も瀬戸内沿岸一帯で共通することが確認されている。また、タタキ技法による成形は、備讃瀬戸地域においては古墳時代後期に到るまで踏襲されるが、紀淡海峡付近や大阪湾南岸一帯、淡路地域の製塩土器には、すでにみられない点を指摘することができる。

さて、丸底型式の製塩土器は、古墳時代中期後半から後期前半にかけて大阪湾南岸から淡路地域にかけて流布していることが第3図においても理解できる。特に、兵庫県津名郡東浦町に所在する引野遺跡^(注12)では、丸底型式の製塩土器が、脚台式製塩土器から徐々に器形的変遷を遂げて成立する過程が良好な土器群によって検証されている(第4図)。まず、脚台Ⅲ式に比定できる脚部は、脚底部の接地面も広く、脚台として十分機能していたと考えられる。しかし、脚台Ⅳ式では、もはや、自立する機能は消失し、脚台の形骸化が顕著にあらわれる。特に、脚台Ⅳ式の最終段階では、脚台自体が突起化しており、形態的にも消失寸前の様相を呈している。その後に分けられる丸底型式の最古段階では、突起自体が消失し、底部外面中央部を指押さえによりわずかにつまみ出されるまでに形骸化している。現時点での各型式の概ねの年代は、脚台Ⅲ式から脚台Ⅳ式への過渡期が、布留式併行期新段階に比定されており、脚台Ⅳ式から丸底型式への過渡期が、陶邑編年TK208型式併行期に比定されている。丸底型式の製塩土器が、古墳時代中期に到り突然、出



第3図 古墳時代における各地の製塩土器
(近藤義郎編『日本塩業大系』史料編考古 日本塩業研究会 1978)抜粋・加筆



第4図 脚台部の変化
(兵庫県引野遺跡出土)

現するのではなく、脚台式の製塩土器の形骸化によって生成することが明確になり、その資料的価値は高い。

なお、別に考察する予定であるが、丸底型式の製塩土器が、極端な小型化に到った経過について簡単にふれておく。

脚台式から丸底式へと変化する時期は、先に述べたように陶邑編年TK208型式併行期であるが、極端な小型化は、陶邑編年TK23型式から同TK47型式併行期に顕著になることが、先に述べた和歌山県西庄遺跡の事例からも明らかである。当該併行期は、次章で述べるように技術者系渡来工人の集落内参入を契機として、集落の生産力が向上し、馬の飼育が中核をなす集落において開始される時期でもある。この時期に丸底型式の製塩土器が小型化される必要理由には、馬の広範囲な移動が戦術的にも不可欠であったことや広範囲の取引を行ううえでも馬が不可欠であったことなどが考えられる。その馬の移動を支障無く効率的に進める必要から、製塩土器の極端な小型化が大阪湾南岸や紀淡海峡付近の製塩遺跡を中心に推し進められ、神戸市域や遠くは備讃瀬戸地域にまで広がったと考えられる。製塩土器の小型化は、馬の需要と供給を制度的に推進するうえでの技術革新と考えられる。しかし、一方では、それに供した容器が必ずしも土器でなければならない必然性もない。従前から考えられてきた宗教的儀礼用としての製塩土器についても考慮する必要がある、小型化の背景には複合的な要素が想定できる。

4. 集落跡の属性研究と製塩土器の具体的様相

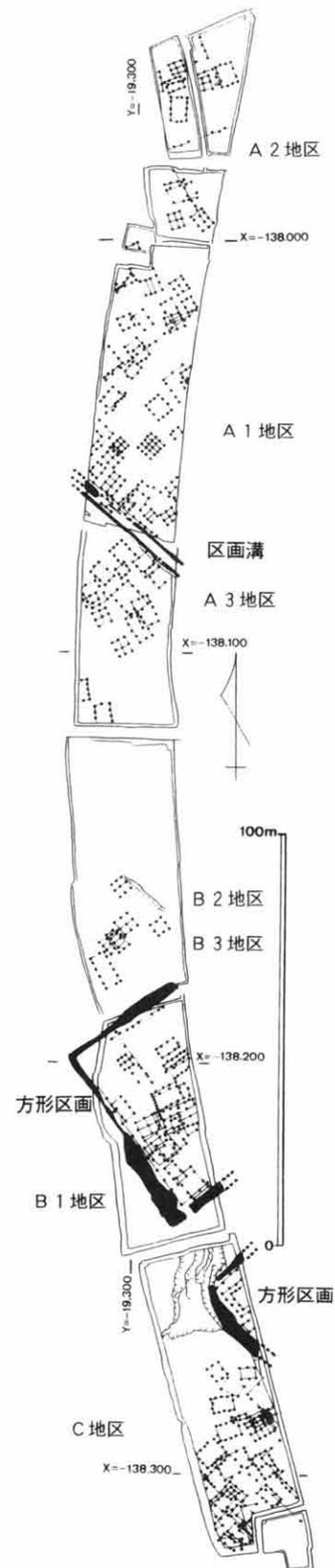
京都府精華町森垣外遺跡^(注13)は、陶邑編年TK208型式から同TK47型式併行期に比定できる掘立柱建物跡群によって構成される集落跡である。同時期の一般的集落では、依然として竪穴式住居跡が居住施設の主流であるが、当該遺跡では、すでに掘立柱建物を主たる居住施設として採用している。また、これらの掘立柱建物群は、雑然と点在するのではなく、一辺46mの方形区画溝内に整然と併置されていたことも判明した。この区画は、当該遺跡地内において2か所で確認しており、また、区画溝外周囲には居住施設を殆ど検出していないことから、隔絶された空間に主要居住施設が存在していたと考えられる(第5図)。

さらに、森垣外遺跡を特徴付ける遺構としては、大壁住居跡がある。一般的に大壁住居跡は、古墳時代中期以前には見られない建築様式であり、朝鮮半島起源と考えられている。当該遺跡で

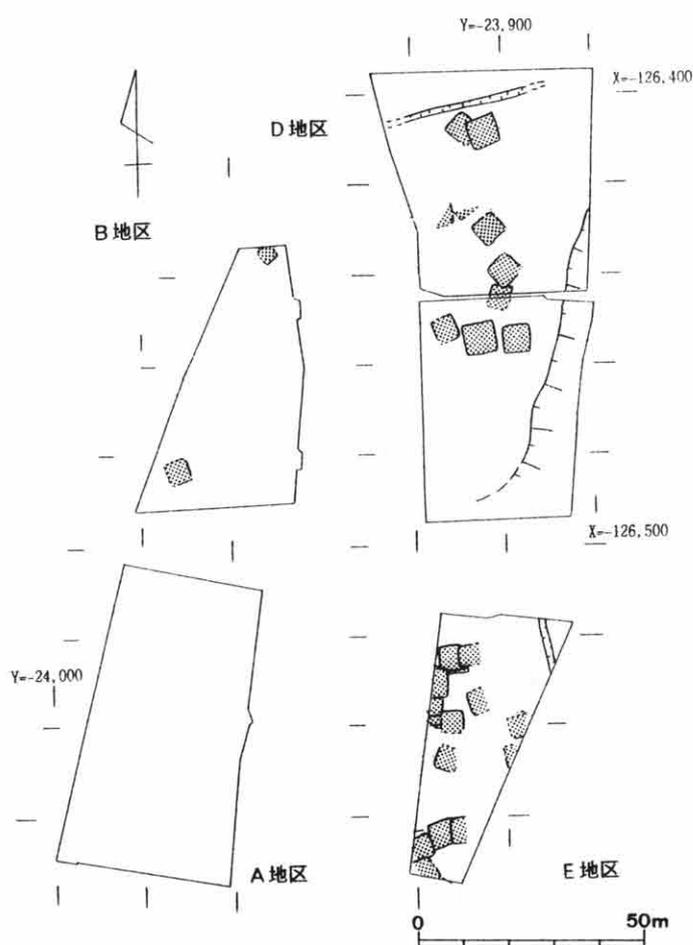
は3棟検出しているが、先述した大型掘立柱建物群を囲繞する方形区画溝内での検出ではないことから、主要施設から離れた地点に設営された「倉庫」であった可能性が高い。また、当該遺跡では、陶質土器や韓式系土師器などの外来系土器が出土するとともに、大量に出土する須恵器は、三辻利一教授による胎土分析の結果および肉眼観察によって大阪府陶邑古窯跡群からの搬入品が多く含まれていることがわかっている。^(注14)

一般的に古墳時代中期の技術革新には鍛冶による鉄器生産が大きく影響したと考えられる。それらの工程では、鉄滓が多く生じるため、集落内の鉄滓出土は、鍛冶などが行われたことを示す遺物として認識されている。当該遺跡においても鉄滓や椀形鉄滓、鞆羽口が出土し、焼土坑も検出していることから、集落内で鍛冶が行われていたことを推測させる。鉄製工具を集落内で生産する技術の定着は、生産力向上につながり、中核的な集落へと変貌を遂げていく重要な契機ともなったのであろう。また、精巧な鏡形、剣形、勾玉形などの石製模造品や滑石原石の多量出土は、交易によって原石を入手し、集落内で石製品を生産したことを示唆している。^(注15) なお、滑石原石が露頭する和歌山県北部におもむき、原石の採取地を実見した結果、森垣外遺跡出土の滑石は紀伊産と同定できた。この結果は、紀淡海峡付近から搬入された製塩土器や軽石の出土とともに、当時の交易の実態を把握するうえで重要な認識である。

さて、本稿の主題である製塩土器について概観しておきたい。森垣外遺跡の各調査区からは、相当量の製塩土器が出土している。その多くは細片であるため、形態については不明な点が多いが、和歌山県紀淡海峡付近から搬入された貝殻条痕を内面に有する個体(第7図1・2)や還元焼成の個体等が確認できる。また、蛸壺形を呈する大阪湾沿岸からの搬入品(第7図5)や胎土に多くの砂粒を含み、外面に煤が付着する特徴を有する神戸市域からの搬入土器も散見できる。製塩土器で得られる塩は、固形塩であり、食用、工作用、宗教的な儀礼用と用途もさまざまであるが、当該遺跡では、馬歯を埋納したピットを検出していることから、馬の飼育が集落内で行われたことが想定できる。馬の飼育には塩は飼料として不可欠であり、一日の摂取量は、運動量の多い時で概ね二勺を必要とするが、大量に出土する製



第5図 京都府森垣外遺跡掘立柱建物跡分布図



第6図 京都府内里八丁遺跡竪穴式住居跡群分布図

塩土器が、それと密接に関係することも念頭におかなければならない。森垣外遺跡から出土する製塩土器に、四條畷市域で実見した土器を一定量含む背景には、同地域からの馬の移動なども考慮する必要がある。

次に、森垣外遺跡と対比するために京都府八幡市内里八丁遺跡^(注16)の集落構造と出土製塩土器についてみておきたい。

京都府八幡市内里八丁遺跡(第6図)は、森垣外遺跡とは異なり、竪穴式住居跡群によって集落が構成される集落跡である。掘立柱建物跡や方形区画溝の検出もなく、また、陶質土器などの出土もないことから一般的な農村集落跡と考えられる。当該集落跡から出土した製塩土器(第7図)は、丸底Ⅰ式に同定できる土器がほとんどであり、

筒形を呈する個体が多い。明確な根拠をもって搬入元を特定できないが、胎土、色調、焼成などの諸様相からほぼ同一地域から搬入された可能性が指摘できる。

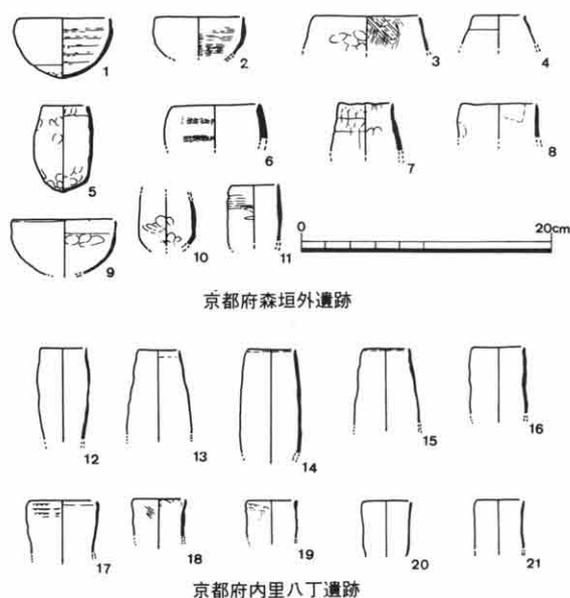
先に述べた森垣外遺跡では、紀淡海峡付近から神戸市域の広範囲な地域を含む大阪湾沿岸地域からの搬入が確認できたが、内里八丁遺跡では、同一地域からの搬入の可能性が高い。両集落にみられる相違は、各地域における集落のあり方の違いを反映しており、これは、製塩土器のみならず他地域との交易自体が、根本的に異なっていることを示している^(注17)。製塩土器の量的な相違にも留意を必要とするが、搬入元が、一地域に限定されるのか、あるいは広範囲な地域からの搬入なのかの検証も重要な集落の属性研究の要素である。

5. まとめ —製塩土器研究の問題点の指摘—

製塩土器の研究は、土器編年や胎土、焼成、色調の観察による地域性の把握が基本となって進展した。また、奈良県天理市布留遺跡の研究^(注18)などにより、消費地での製塩土器のあり方が次第に詳らかになり、古墳時代中期における交易の一側面が明かになりつつある。しかし、近藤義郎が指摘するように、集落跡から出土する製塩土器の搬入元を土器の肉眼観察から判定することは、

極めて困難であり、内陸部における製塩土器研究は、未だ、確実な同定を確立する段階から脱していないといえる。

さて、各集落遺跡から出土する製塩土器の総量は、森垣外遺跡で詳しくみたように集落毎の属性によって大きく異なると考えられる。正確な総量を示すことはできないが、掘立柱建物跡によって構成される森垣外集落の出土総量は、竪穴式住居跡によって構成される内里八丁集落のそれより確実に多いことが指摘できる。また、搬入元も複数であることが確認できる。今後、内陸部における製塩土器研究は、集落の属性研究の一環として捉える必要がある。



第7図 森垣外・内里八丁遺跡出土製塩土器

一方、天然の牧としての機能を有した四條畷市域での製塩土器の出土総量は、製塩遺跡に匹敵する出土量に達している。今後は、当該地域の製塩土器が、内陸部の集落跡から出土するか否かを確認する必要がある。なお、四條畷市域からは、平行タタキをもつ製塩土器が大量に出土しており、焼き塩処理を行っていた可能性を示唆する調査例も増加している。平行タタキを有する個体の搬入元を備讃瀬戸地域とするには、多くの問題が含まれることをあらためて指摘しておく^(注20)。また、当初、森垣外遺跡出土の製塩土器に、多くの紀淡海峡付近からの搬入土器が含まれる印象をもっていたが、和歌山市西庄遺跡から出土した製塩土器を詳細に実見した結果、胎土・焼成・色調が極めて酷似するものの、極細砂の有無などから、その同定に疑義があることを認識した。また、天理市布留遺跡や神戸市域、四條畷市域からの製塩土器には、紀淡海峡付近からの搬入土器の出土比率が僅かであることも判明した。これらの認識は、今後、古墳時代中期から後期前半の交易を理解する上での基礎認識となると思う。

本稿は、平成12年度に実施した当調査研究センター共同研究「古墳中期における南山城地域の製塩土器」の成果の一部である。共同研究代表者であった松尾史子氏の異動により、本文の執筆は小池が担当した。基本的資料の集成や土器実見に際しては、松尾氏に負うところが多い。

なお、共同研究を進めるにあたり、以下の方々から有益な教示を頂いた。芳名を記して感謝の意をあらわしたい。

池田毅・伊藤宏幸・大石雅一・川吉知子・北野隆亮・高野政昭・谷正俊・野島稔・日野宏・間壁霞子・松下彰・村上始・村田弘・山岡邦章・吉識雅仁(順不同・敬称略)

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第2係主任調査員)

- 注1 富加見泰彦「紀淡海峡の製塩土器」(『久保和士君追悼考古論文集』久保和士君追悼考古論文集刊行会) 2001
- 注2 大久保徹也「喜兵衛島遺跡群出土製塩土器について」(『喜兵衛島一師楽式土器製塩土器遺跡群の研究』喜兵衛島刊行会) 1999
- 注3 正岡陸夫・光永真一・島崎東・平井泰男・高畑知功「百間川原尾島遺跡2」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会) 1984
- 注4 高野政昭「(7)製塩土器」「(9)古墳時代の製塩土器」(『奈良県天理市布留遺跡(里中)地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団) 1995
- 注5 広瀬和雄「小島東遺跡」(『岬町遺跡群発掘調査概要-小島東遺跡・淡輪遺跡-』大阪府教育委員会) 2001
- 注6 野島稔「大阪府四條畷市発見の製塩土器」(『古代学研究』第86号 古代学研究会) 1978
- 注7 田中清美ほか『大阪市森小路遺跡発掘調査報告書』(財)大阪市文化財協会 2001
- 注8 中居さやか・口野博史・安田滋・池田毅・千種浩・中村善則・川上厚志『白水遺跡第3・6・7次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2000
- 注9 菅本宏明『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1981
- 注10 『吉田南遺跡現地説明会資料』神戸市教育委員会 1977
- 注11 黒田恭正・東喜代秀・中村大介「寒風遺跡第2次調査」(『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会) 1999
- 注12 伊藤広幸「引野遺跡発掘調査概要」(『東浦町埋蔵文化財調査報告』第2集 東浦町教育委員会) 1999
- 注13 京都府森垣外遺跡の発掘調査概要報告は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター発刊、京都府遺跡調査概報第86冊(1999)、第91冊(2000)、第96冊(2001)に掲載している。
- 注14 三辻利一「森垣外遺跡出土古式須恵器の蛍光X線分析」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注15 小池寛「石製模造品の生産と消費に関する一事例」(『古事』第6冊 天理大学考古学研究室紀要) 2002
- 注16 森下衛・柴暁彦「内里八丁遺跡2」(『京都府遺跡調査報告書』第30冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注17 小池寛「古墳時代中期集落の動態と古墳の変遷」(『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』日本考古学協会) 2002
- 注18 高野政昭「布留遺跡出土の古墳時代製塩土器」(『天理大学学報』第157輯 天理大学学術研究会) 1988
- 注19 近藤義郎・岩本正二「4 塩の生産と流通」(『日本考古学』3 岩波書店) 1986
- 注20 四條畷市域の古墳時代集落および出土製塩土器については、四條畷市教育委員会野島稔氏、村上始氏にご教示頂いた。記して御礼を申し上げます。

8. ^{おおなる}大成古墳群・イリ遺跡

所在地 竹野郡丹後町字竹野小字イリ
調査期間 平成14年4月16日～7月30日
調査面積 約800m²

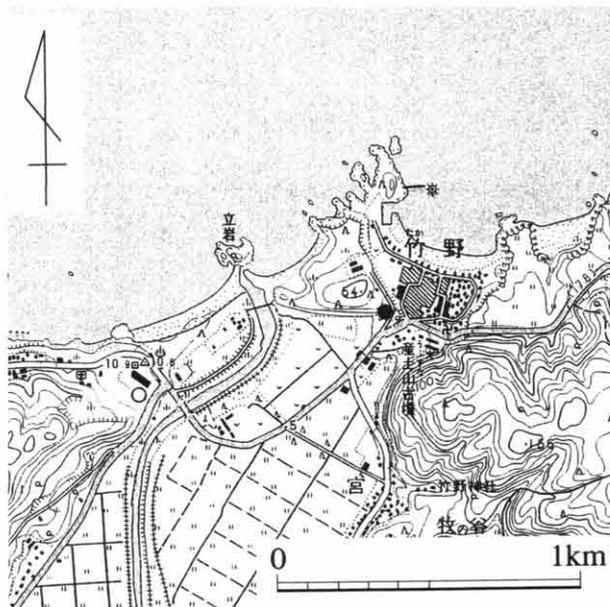
はじめに 大成古墳群・イリ遺跡は竹野川河口部東岸、日本海に張り出した丘陵の南斜面に位置する。周辺部には日本海側でも最大級の古墳である神明山古墳、中期の大型円墳である産土山古墳。後期の群集墳である大成古墳群など多数の古墳が分布し、集落遺跡としては道の駅周辺に弥生時代前期から中世までの複合集落である竹野遺跡が所在することが知られている。

今回の発掘調査は、一般国道178号線第一種特殊改良事業に伴う事前調査として京都府土木建築部の依頼を受け実施した。なお、遺跡名称に関して、昨年度は愛宕神社古墳として実施したが、丹後町教育委員会と京都府教育委員会の協議の結果、大成古墳群の一部という認識がなされ、昨年度調査した愛宕神社古墳を大成17号墳、今回調査を実施した古墳を大成16号墳・大成18号墳、上層に存在する中世の遺構群をイリ遺跡として報告することとなった。

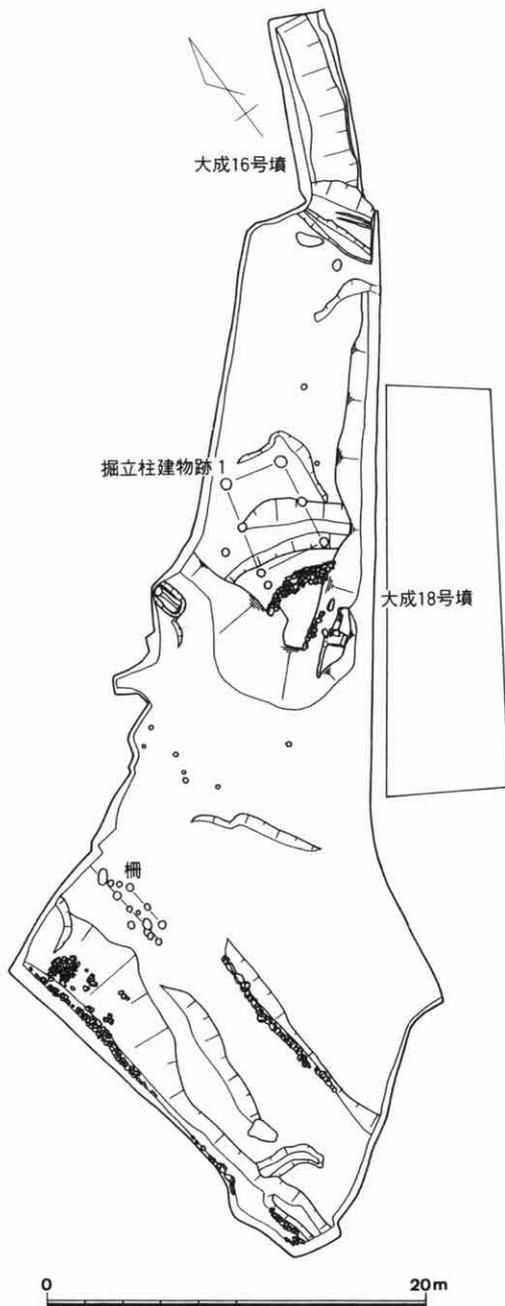
調査概要 今回の調査対象地内では2基の古墳および中世の掘立柱建物跡を中心とする遺構を確認した。以下、各遺構について概観する。

大成16号墳 調査地北西部で確認した横穴式石室墳である。墳丘の大部分は調査対象地外となり、今回の調査地では墳丘裾および墳丘後背部分の地山整形面を確認することしかできなかった。部分的に確認した墳丘裾から見て、直径15m前後の円墳に復原できると考える。また、包含層中からTK43型式併行期とみられる須恵器高杯片が出土しており、当古墳の築造時期に近いものと考えられる。

大成18号墳 調査地中央部で確認した横穴式石室墳である。墳丘・石室は道路工事により大部分が破壊されている。墳丘は外護列石を墳丘上位側に用いる円墳であり、その規模は復原径15m、高さ2mを測る。石室は側壁の一部が遺存していたにすぎず平面プランなどを復原するには至らなかった。南に開口し、構築方法は基底石に腰石



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000網野)



第2図 調査地全体図(1/400)

を用い、2段目以降を平積みによって行っているものと判断された。埋葬面は1面のみを確認し、須恵器・土師器・鉄鏃・刀子などが検出された。築造時期は石室内出土遺物からTK209型式併行期と考えられる。

掘立柱建物跡1 大成18号墳の北側の緩斜面をテラス状に整形し、その上に構築された掘立柱建物跡である。東西1間×南北2間の規模を有する。テラス埋土からの出土遺物には須恵器・土師器・黒色土器・白磁・青磁などがある。これらの出土遺物から12世紀代の建物跡と判断される。この建物の北にあるテラス状の地形も同時期に造成されたものと判断される。

柵 南西部谷地形で確認したピット群であるが、その配置から柵を構成するものと判断した。周辺の包含層から出土した遺物から見て掘立柱建物1と同時期のものとみられる。

まとめ 以上、大成古墳群・イリ遺跡の調査成果について概観したが、以下の点が明らかとなった。

古墳時代の遺構としては、2基の横穴式石室墳を新たに確認した。調査地と同一丘陵上には大成古墳群や片山古墳群など、20基近くの横穴式石室墳が造営されており丹後半島でも有数の後期古墳群と考えられる。昨年度の調査と併せ3基の横穴式石室墳の資料を追加したことは、今後、この地域の後期古墳を研究する上で重要と言える。

中世のイリ遺跡に関しては、近接地に福蓮寺という小字のあることから考えて寺院に伴う遺構である可能性がある。出土遺物に一定量の輸入陶磁器が含まれる点は、当遺跡も中世竹野遺跡の一角を占めるものとして評価される。

以上のように竹野川河口を望むこの地域は、古墳時代には墓域として、中世から近世にかけては寺域として土地利用がなされたと考えられる。

(石崎善久)

9. やまだくろだ 山田黒田遺跡

所在地 与謝郡野田川町大字上山田小字カリヤ232ほか

調査期間 平成14年8月7日～9月3日

調査面積 約140m²

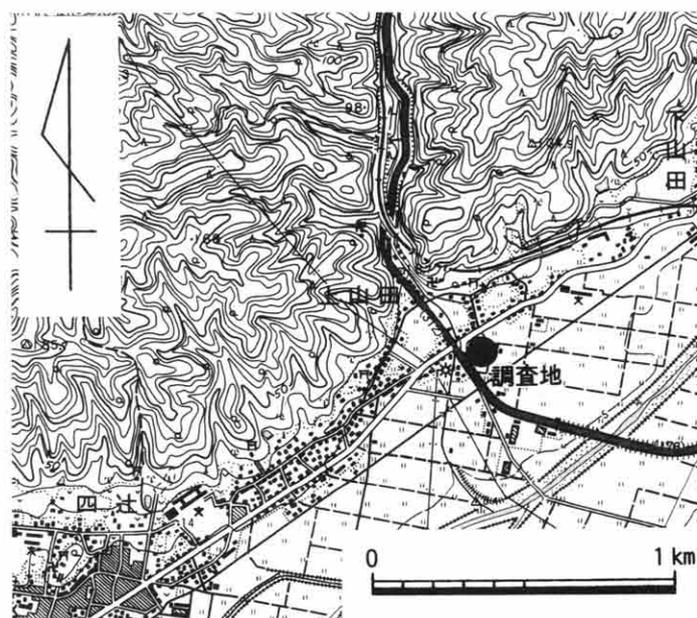
はじめに 山田黒田遺跡は、弥生時代から中世にかけての遺物が散布する集落遺跡として認知されている。今回の調査は、平成14年度主要地方道宮津八鹿線交通安全施設等整備事業に伴い京都府土木建築部の依頼を受けて、道路拡幅予定部分の発掘調査を実施した。

調査地は、遺跡範囲内の南西端部にあたり、野田川町から大宮町にかけての町境にある水戸谷の南側にあり、西側を流れる水戸谷川に隣接する。

調査の概要 当遺跡はこれまで未調査であり、遺構・遺物の有無の確認・範囲確認を目的として調査を実施した。調査は、道路拡幅予定地内に東西方向に3か所のトレンチを設定した。東側に設定した第1・2トレンチでは、トレンチが小規模であったことに加え、湧水が著しい砂の堆積層で地盤が安定しておらず、遺物は少量出土するものの顕著な遺構は検出できなかった。西側に設定した第3トレンチでは、トレンチ東端において現地表から約1.5mの深さ(標高約8.3m)の比較的安定した面で、北から南へ流れていたと思われる自然流路を検出した。流路是水戸谷川の氾濫や北側にある丘陵からの流れ込みによって形成されたものと考えられる。流路の堆積は粘土と砂の互層で幾度かの流れが確認できる。その堆積層には遺物が含まれる黒灰色粘土層があり、古墳時代前半の土器が集中して出土した。

まとめ 各トレンチとも小規模であり顕著な遺構は検出できなかった。しかし、第3トレンチでは古墳時代前半を中心とした遺物が出土する自然流路を検出した。遺物は、上流もしくは北側の丘陵から流れ込み集積したものであると考えられる。

今回の調査では、遺跡の範囲や性格を示すような遺構は確認できなかったが、弥生時代から中世までの土器などが少量ではあるが出土した。おそらく調査地より北側の丘陵裾部の平坦地部分に集落の中心部が存在すると推定される。



(村田和弘)

調査地位置図(国土地理院1/25,000四辻)

10. のじょう 野条 遺跡

所在地 八木町字野条

調査期間 平成14年5月19日～8月9日・10月10日～15日

調査面積 約600m²

はじめに 野条遺跡は、大堰川東岸に位置する筏森山の東に広がる平地に営まれた集落遺跡で、八木町教育委員会・京都府教育委員会による分布調査、試掘調査で存在が明らかになった。

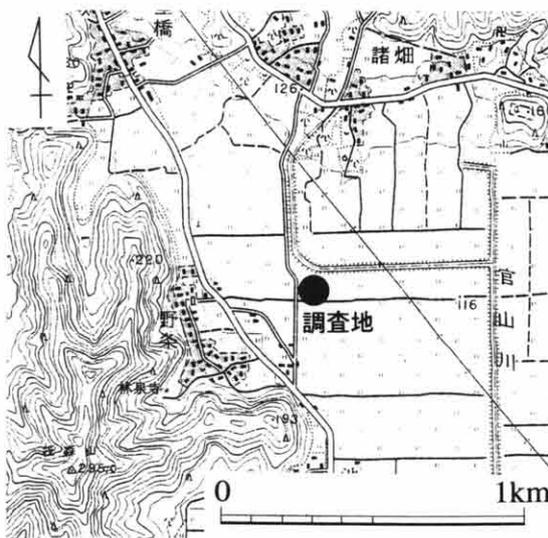
今回、野条遺跡推定範囲内において亀岡園部線改良工事が計画されたことから、事前に工事対象地区における遺構の有無、分布状況などを確かめることを目的として、試掘調査を実施した。

調査の経過 調査対象地内に試掘トレンチを4カ所(第1～4トレンチ)を設定し、調査を行った。調査は、まず、耕作土・床土などの表土と遺物包含層である黒色土をバックホーを用いて除去した。地山である黄色粘土層上面において遺構の検出を目指し、精査を行った。地山面を平滑に整え、土色の違いに留意して遺構検出に努めた。その結果、竪穴式住居跡をはじめ、溝、土坑、多数のピット群などの遺構群を検出した。各トレンチの遺構の状況は以下の通りである。

第1トレンチでは、大型の土坑、ピットを多数を検出した。土坑は直径約3m、深さ約60cmの楕円形である。時期は明らかでないが、埋土の状況を検討した結果、古代に遡るものであると判断した。第2トレンチでは、竪穴式住居跡、溝、土坑、ピット多数を検出した。竪穴式住居跡は、一辺が約5mの方形である。赤く変色した埋土に覆われ、床面付近からは垂木や柱、屋根材の一部とみられる炭化物が多量に出土した。火災家屋と考えられる。床面では弥生時代後期末期の土器を良好な状態で一括して検出した。北陸・近江などの遠隔地から搬入されたとみられる土器が含まれている。溝は竪穴式住居と同じ時期に掘削されたものである。第3・4トレンチでは、溝、

土坑の一部、ピットなど多数を検出したが、時期は明らかでない。

まとめ 竪穴式住居跡の検出により、野条遺跡が弥生時代後期末期の集落遺跡であることが判明した。溝やピット群、土坑などについては、所属時期は不明である。竪穴式住居跡で検出した弥生時代後期末の遺物群に混じって、弥生時代中期に特徴的な形式を有する磨製石鏃なども出土しており、時期が明らかでない遺構のなかには、弥生時代中期に遡るものもある可能性を考えておきたい。



調査地位置図(国土地理院1/25,000殿田)

(田代 弘)

11. ^{うちさとはっちょう}内里八丁遺跡第5次

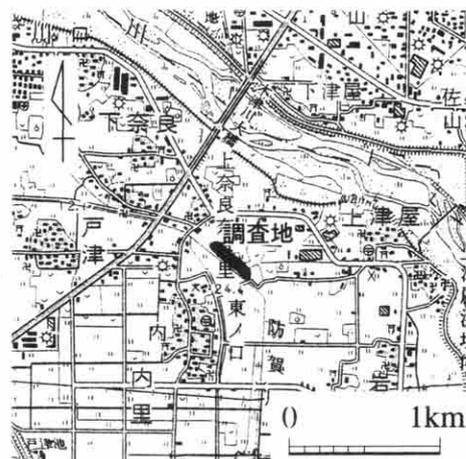
所在地 八幡市内里小字八丁・日向堂
 調査期間 平成14年6月19日～8月12日
 調査面積 約430m²

はじめに 内里八丁遺跡は、木津川旧流路の自然堤防上に立地する遺跡である。昭和63年度以降、第二京阪自動車道建設に伴う発掘調査が実施され、弥生時代の水田跡、奈良時代に設置された「奈良園」に付属すると思われる掘立柱建物跡および道路状遺構、さらには平安時代から中世にかけての耕地跡などが検出された。今回の発掘調査は、防賀川に沿った府道八幡木津線の建設工事に先立って、遺構の有無と密度を確認するために実施した。調査は、道路の中心線沿いに4×10mのトレンチを10か所設定し、確認される標高と遺構・遺物の密度を記録しつつ進めた。また、最も南東端に位置する第1トレンチは、ボックス埋設に伴い遺構の破壊が懸念されるため、協議の上、面的な調査を実施した。

調査概要 設定した第1～10トレンチのうち、遺構が確認されたのは第1～5トレンチである。第6～10トレンチは、近世の耕作跡の下層に後背湿地または氾濫原に由来する砂層やグライ化した粘質土が厚く堆積していた。一方、第1～5トレンチは、自然堤防を形成する土壌化した粘質ないしは砂質土によって構成され、大別すると、中世後期、奈良～平安時代、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物を検出した。

第1トレンチでは、平安時代の流路と若干のピットを検出したが、遺物は弥生時代後期に属するものが多く、磨滅を受けた石庖丁が出土した。第2トレンチでは、方形の鉄製鋤鋤先が出土した。第3トレンチでは、中世遺構面から掘り込まれたピット中に馬頭骨とみられる獣骨片、また最下層の遺構面では弥生時代後期後半の完形の甕が投棄された溝を検出した。第4・5トレンチは、弥生時代後期～古墳時代前期に相当する面で水田畦畔の痕跡を確認した。また、第5トレンチでは、飛鳥～平安時代の土器が多量に集積する土器溜まりを検出した。

まとめ 今回の調査では、試掘調査という制約もあって遺構の性格を明らかにするには至らなかった。しかし、成果のあがった第1～5トレンチでは、狭長な面積にもかかわらず、コンテナにして15箱余りの遺物が出土し、鉄器や石器をも含むなど多彩である。おそらく集落の縁辺部から生産域にかけての部分に該当していると考えられる。



調査地位置図

(河野一隆) (国土地理院1/50,000京都西南部・東南部)

12. ^{ひがしはら}東原遺跡

所在地 八幡市橋本東原
 調査期間 平成14年7月22日～8月29日
 調査面積 約600m²

はじめに 今回の調査は橋本農住組合の土地区画整理事業に伴い、八幡市の依頼を受けて実施した。東原遺跡は散布地として認識されていたが、遺跡としての具体的な様相は不明であった。調査地は男山丘陵の北西辺の、東方に裾を開く丘陵上に位置する。周辺遺跡としては丘陵を挟んで南西部に四天王寺や平城宮式の瓦の出土で知られる楠葉・平野山瓦窯が、北部に室町時代の経塚である橋本経塚が存在する。また、調査区西隣には近世以降、石清水八幡宮の末社として建立された猿田彦神社が存在し、近隣住民により信仰の対象とされてきた。このため調査区においても周辺遺跡に類する瓦窯や中世・近世の遺構の存在が期待された。

調査の概要 調査区内に約30～110m²の、計9本の試掘トレンチを設定した。トレンチは調査区全般にわたって、ほぼ均等に配し、北東～南西に順に第1～9トレンチとした。調査の結果、各トレンチでは、地表下約0.2～2.2mで竹林造成に伴う客土や耕作土を、それ以下でシルト・砂または粗砂・細砂がラミナ状に堆積する安定した自然堆積の様相を確認した。表土は丘陵頂部で薄く、裾部で厚く堆積しており、裾部で地表下約3mまで掘削したが、生活面の広がりには認められなかった。主な検出遺構としては、第1・6トレンチの落ち込み、第3・7トレンチの溝などである。いずれも表土直下のシルト層上での検出である。うち第7トレンチの溝は幅約0.7m、長さ約0.8m、深さ約0.2mを測り、両端はトレンチ外に延び、何らかの区画溝と考えられる。これらの遺構は、同様の砂質土で埋もれているが、遺物はほとんど出土していない。唯一、第6トレンチの落ち込み埋土から江戸後期の染め付け片が出土した。また、土師皿や乾隆通宝が第7・



調査地位置図

(国土地理院1/25,000京都西南部)

2トレンチのシルト層上から、瓦器碗片が第1トレンチ、陶磁器片・棧瓦が第7トレンチ、泥面子が第8トレンチの表土中からそれぞれ出土した。土師皿や瓦器碗片は中世、他の遺物は、概ね江戸後期～末期におさまるものと考えられる。

まとめ 調査の結果、調査区内には表土直下に安定した地盤が広がっていることを確認した。ただこの地盤をベースとする遺構の兆候は薄く、遺構を伴ったにせよその多くは竹林造成時に削平を受けてしまったものと考えられる。

(中村周平)

13. ^{ふたまた}二又遺跡第2次

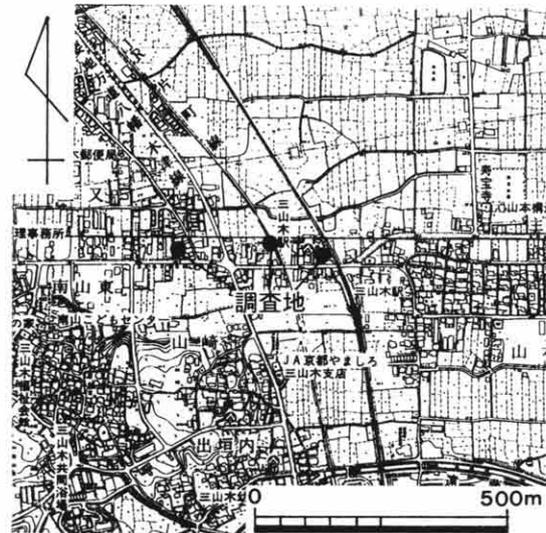
所在地 京田辺市三山木田中19-2他
 調査期間 平成14年5月20日～9月27日
 調査面積 約1,000m²

はじめに 今回の調査は、三山木地区特定土地区画整理事業に伴い、京田辺市の依頼を受けて実施した。二又遺跡は、JR三山木駅の北側に位置する沖積地にあり、飛鳥～平安時代後期にかけての井戸や堀跡などが検出されている。この付近を古代の山陰・山陽併用道が通っていたと想定されており、山本の字名から「山本駅」の存在が推定されている。

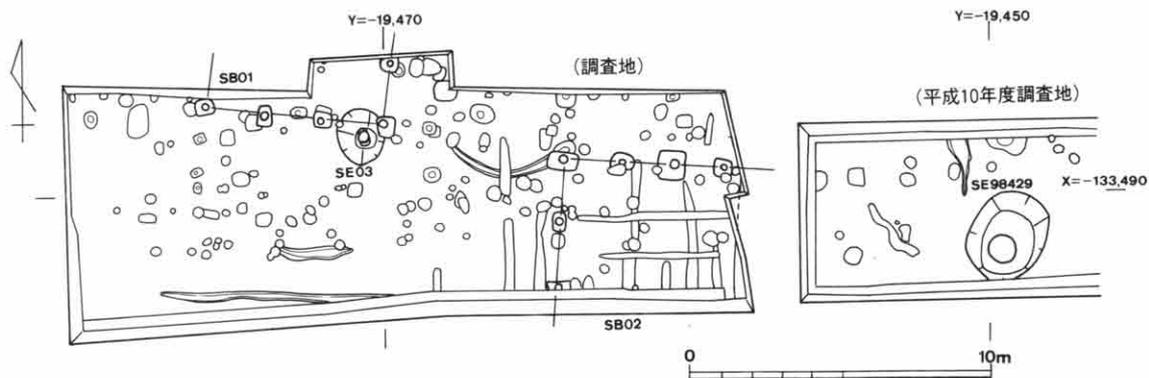
調査概要 遺跡の西端部(第1トレンチ)、ほぼ中央部(第2トレンチ)、東端部(第3トレンチ)で調査を実施した。第1トレンチでは、近世後期の水田と近代の洪水に伴う砂の堆積などが認められたのみで、その他の顕著な遺構は確認できなかった。また、第3トレンチにおいても、耕作溝と畦状の遺構を検出しただけで、建物跡など顕著な遺構は確認できなかった。第2トレンチからは、掘立柱建物跡2棟(SB01・02)、井戸1基(SE03)、柱穴群、溝などを検出した。建物跡の全容については不明である。この付近については、京田辺市教育委員会で調査が実施されており、飛鳥時代から平安時代後期の建物跡や井戸などが集中する様子が窺える。

SB01は、調査地中央で検出した掘立柱建物跡である。規模は、東西3間×南北2間以上である。井戸SE03を切る形で柱掘形が設けられていた。西端の掘形中央からは、直径20cmの柱を確認している。柱間の距離は、東西が約1.9m、南北が2.1mである。

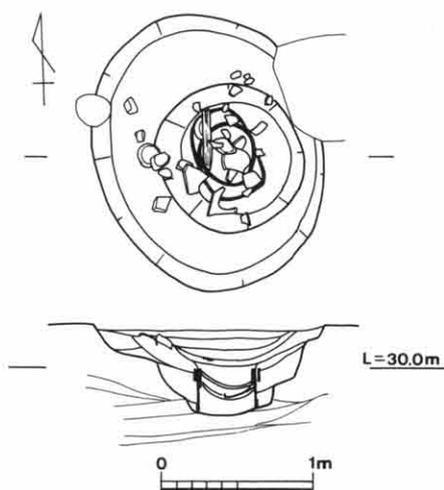
SB02は、調査地東端で検出した掘立柱建物跡である。規模は、東西3間以上×南北2間以上である。東隣の調査地の柱穴との関連を検討したが、柱間の距離が合わないことから、未調査部までの、東西4間規模の建物であった可能性が高い。柱間の距離は、東西が約1.9m、南北が2.1mと、SB01と同じである。さらに、SB01の南辺とSB02の北辺がほぼ一線になることから、同時期に同方向に建てられたと考えられる。また、SB02東側には、丸太を削り貫いた奈良時代後半の井戸SE98429が存在する。井戸の掘形の長軸線が建物跡と平行することを考慮すると同時期の可能性もある。井戸SE03は、SB01に切られた形で検出した。掘形は、東西1.5m、南北2.0mを測る。掘形中央には曲物が据えられていた。曲物の規模は、直径37cm、残存高30cmである。井戸内か



第1図 調査地位置図
(1/15,000京田辺市全区)



第2図 遺構配置図



第3図 井戸SE03実測図

ら奈良時代中頃の土器が出土しており、検出面で出土した破片と接合できたことから、奈良時代中頃に一時に埋ったものと考えられる。SB02東側から土塁ならびに付随する溝が京田辺市教育委員会の調査で確認されており、これらの遺構は、ほぼ同時期のものと考えられる。

まとめ 調査の結果、道路状遺構や山本駅関連の遺構・遺物は認められなかった。これまでの調査成果も含めて考えると、遺跡範囲のほぼ中央付近に建物跡や井戸などが集中し、隣接地である第3トレンチでは、遺構が希薄であることから、限られた範囲が飛鳥～平安時代後期の居住域であった可能性が高い。このような遺構の状況は、古代山陰・山陽併用道や山本駅との関連を考える

上でも興味深く、今後の周辺地域の発掘調査に期待される。

(岡崎研一)



第4図 現地説明会風景(第2トレンチ)

14. ^{みやまぎ}三山木遺跡第5次

所在地 京田辺市三山木柳ヶ町52-4 他
 調査期間 平成14年5月21日～7月12日
 調査面積 約350m²

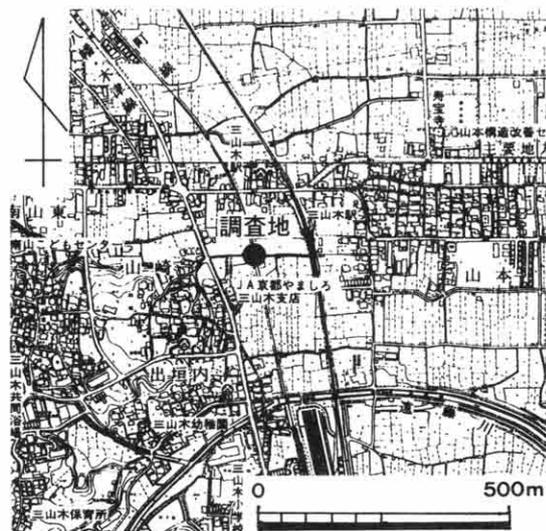
はじめに 今回の調査は、三山木地区特定土地区画整理事業に伴い、京田辺市の依頼を受けて実施した。三山木遺跡は、山崎地区の丘陵から北東方向に延びる微高地付近に広がる遺跡で、弥生時代から中世にかけての土器が散布する。過去の調査成果から丘陵部は大きく削平されており、丘陵裾部から弥生土器と石製品が多量に出土している。

調査概要 JR西日本旅客鉄道学研都市線線路敷き下に、2か所の調査地を設定した。南側の第1トレンチは、その断面から丘陵先端付近に当たり、大きく削平されていたことが判った。北側の第2トレンチは、丘陵裾部付近に当たり、第1トレンチから約1.2mの高低差が認められた。丘陵裾部付近のみ弥生土器を包含する層があった。東西方向の溝SD09は、この層を掘り込む形で検出した。規模は、幅約4m、深さ約0.8mである。出土遺物から鎌倉時代である。トレンチ中央付近から、東西方向の溝SD12を検出した。規模は、幅約3m、深さ約0.4mである。出土遺物から平安時代とした。これらの遺構の上に鎌倉時代の土器を包含する層が薄く堆積していた。この包含層出土遺物には埴輪片もあり、削平された丘陵部に古墳が存在したことを示唆する。また、軒丸瓦が1点出土している。平城6134C型式と思われる、近辺の遺跡では、長岡京左京121次調査に類例を見る。

まとめ 今回は、昨年度の調査地と隣接する。遺構については、それを補足する形となった。また、第2トレンチ中央の平安時代の溝(SD12)と、南側の溝(SD09)の検出は、第1トレンチ付近に延びる山崎からの丘陵部の削平が多時期にわたって行われたことを示す。この様な状況からみて、丘陵部での平安時代以前の遺構が残っている可能性は低いと思われる。

遺物については、その大半が包含層出土の弥生土器であり、丘陵部には前期から後期まで何らかの遺構が存在したと思われる。中でも前期末から中期前半の土器量は半数以上を占め、南山城地域での当時期の良好な資料を得ることができた。

(岡崎研一)



調査地位置図(1/15,000京田辺市全図)

研究ノート

無垢の喪失

—これからの前・中期旧石器時代研究のために—

中川 和哉

1. はじめに

平成12年11月5日の毎日新聞のスクープによって発覚した藤村新一氏の前・中期旧石器時代遺跡捏造事件は、旧石器時代研究において忘れられないできごととしてその学史に刻まれることと考えられる。今日までマスコミを中心にこのような事件が起きた背景などが、さまざまな出版物で語られている。

私自身もほんの短い時間ではあったが、学生時代に馬場壇遺跡の発掘調査に参加したことがあった。当時の発掘調査についてはずさんなものではなく、慎重に進められており、真剣で張り詰めた空気がそこにはあった印象がある。また、捏造されたとされる石器については、私自身が直接日本の前・中期旧石器を研究対象としていなかったためその発表された成果が捏造であるという疑いは特にもっていなかった。専門家が複数調査しているのだから間違いはないと考えていた。ただ、調査するごとに新しい成果が出ることについては、漠然と不思議なことがあるものだなと思っていた。今から考えるとんだお人好しであるが、旧石器研究者の多くが住んでいる地域の、後期旧石器の研究を主としていることから、私と同じような感想を持っているのではと推測できる。だからといって他人事と言うことはできない。捏造石器を基にした説明を一般の人々に行い、概説書に書いたなど、直接あるいは間接的に資料批判の正道から外れ捏造成果流布の一翼を担ったことは言い逃れできないことと考えられる。個別の捏造石器に専門家がだまされた理屈はそれなりに存在しており、発覚前に捏造を指摘していた論文自体にも問題点は存在している。しかし、ようやく事態が沈静化してきたが、全体的に感情論やいろいろな思惑が依然として錯そうしている。学史として第三者が客観的に評価できるまで捏造事件そのものの話についての言及はこの場では避けておきたい。

本拙稿においては捏造事件発覚によって明らかになってきた旧石器時代の研究法や体質の問題点を基に、これからの前・中期旧石器時代研究の向かうべき方向について私見を述べたい。また、捏造事件によって明らかになってきた事象は、旧石器研究のみならず考古学界全体の問題の縮図と考えてもおかしくない部分も認められる。失敗史からその失敗の本質を学ぶことも重要な課題であると考えられる。

2. 技術形態学に基づく型式分類分類

今回の捏造石器をその発見初期段階から、前・中期旧石器時代の石器ではないという立場を取

っていた研究者はフランスなどの留学経験者であった。彼らにとって日本の「前・中期旧石器時代」の石器は、自分たちの知っている同時代のものとあまりに異なっていたからであろう。それはとりもおさず、日本では技術形態学(山中 1979)的な視点が本当の意味で定着していなかったことを示している。石器はその平面形態だけではなく、その石器を作り上げた技術を基に分類していくことが重要である。剥片石器は原礫→石核調整過程(石核素材作出も含む)→剥片剥離過程→細部調整過程を経て完成する。日本の旧石器研究では一部の石器を除いて接合資料などを基にした剥片剥離過程の復原や形態比較といった面が突出して研究されてきた。本当の意味で細部調整過程を技術的に研究してきた例は稀である。

捏造を比較的早くから指摘していた竹岡俊樹氏の主張の一つは、原人段階の石器の作り方との違いが石器そのものに残された剥離痕から判別できる(竹岡 1989)と言うものである。東北で見つかったヘラ状石器はその細部調整過程においてソフトハンマーを用いているとし、細部調整の前段階の加打と道具が異なっていることを述べ(竹岡 1998)、のちに小型両面調整石が押圧剥離によって作られていることを指摘した。そのようなものを彼自身が分析したヨーロッパの同時代の石器群中に認めることができなかった。特に押圧剥離は一般的に後期旧石器時代に入ってしか認められない技術として知られている。

石器の技術形態学的な立場から型式分類した仕事に『日本の旧石器』(赤澤・小田・山中 1980)がある。しかしこの試みは日本では成功したとは言えない状況下にある。その原因の一つは、総論として賛成していても言葉がこれまでの石器呼称とあまりに違いすぎたことである。特に日本の石器研究の重要な器種にナイフ形石器があるが、ナイフ形石器はその形態研究を行うことだけでも示準石器として有効であることから、その名称の生命力が強く山中一郎氏らの石器名称は定着しなかったのである。

ナイフ形石器の名称はすでに根深く定着しているが技術形態学的視点、特に細部調整過程などを基にした再定義が必要であると考えられる。また、山中氏が主張(山中 1994)するように、技術形態学的な分類は、示準石器を抽出するだけではなく、出土した石器を分析の俎上に上げるということである。こうした視点は後期旧石器時代の石器にのみ限定されるものではない。加工技術や部位が異なっているにもかかわらず同じ名称を与えるような、特定の系統解釈でしか成立できないような型式ではいけない。型式分類の肝要は解釈によらずだれもが認知することができるということである。

山中氏が指摘するように技術形態学に基づく分類は、石器の技術的側面の研究を解き明かす手段であり、石器による行動については、機能の研究が必要となる。しかし、技術形態学に基づく分類は機能分析の基礎になる。ナイフ形石器という分類は、「ナイフ」の形をしているという意味であって、ナイフという用途を持っていることを保証していない。しかし、「ナイフ」という言葉はあまりに手垢にまみれているため、形のみを表しているという約束事を越えて人に作用する。幸いにしてナイフ形石器に関してこのような「意味の過剰」が生じている場合は少ないが、槍先形尖頭器・尖頭器などの論考ではしばしば「意味の過剰」が認められる。形態学による分類

は機能を保証しない。

拙稿(中川 2001)で日本の中期旧石器の代表的石器とされる斜軸尖頭器を考察したが、これまでの技術形態学的検討がずさんであったことは否めない。平面的な形だけが二次加工の違いを超えて分類の基準となっていた。

また、日本において技術形態学の理解を深める石器の技術復原の試みは、松沢亜生氏によって行われてきたが、最近になって『石器研究入門』(M.-L. Inizan, H. Roche & J. Tixier、大沼克彦・西秋良宏・鈴木美保訳)の翻訳などこうした視点が注目されてきている。

3. 石器資料の資料批判と基準資料の抽出

考古学における出土遺物については、これまでその年代的 position についての論議というものが中心で、出土遺物が悪意によって混入されているという可能性を検証するといったことはほぼ行われてきていなかった。文献史学においては、偽書かどうかの検討が徹底的に行われ基礎的な資料となる。これからはこうした可能性もまた検討していかなければならない。

平成14年5月26日の日本考古学協会の席上において、藤村氏関与の遺跡から出土した石器は考古資料として扱うことができないと言う中間報告(日本考古学協会 2002)があった。

こうした事態を受けてか、藤村氏関与以外の「前・中期」旧石器時代の石器を再び注目する動きがある。馬場壇遺跡の調査中には、“石器と言うものはだれが見ても石器に見えなきゃ駄目だ”と言う言葉を聞いた。これは散座乱木遺跡調査以前の圭岩石器などの石器と比較して語られた言葉である。

座散乱木遺跡発見以前に前・中期旧石器時代とされていた石器には、多くの問題点が指摘されている(小野 1969・杉原 1977)にもかかわらず、その問いに答えることなく臆面もなく復権が試みられている。出土状況や出土層位が明らかでなく、追認するにも遺跡が喪失しており、再発掘することが不可能で、その石器自身についても議論が存在するものは慎重に対応する必要がある。

また、剥離痕がほとんどなく人工品に見えないもの、人工品の可能性が人によっては主張されるもの、人工品と考えてもおかしくないものが、それぞれ、その剥離の程度が漸移的に、その個体数がヒエラルヒーをもって存在する資料群のうち、人工品と考えてもおかしくないものが一定のパターンを示さず、単純な加工のものである場合は要注意である。調査者によって選別が行われて、調査後の資料を見ると人工品と思わせる資料群が成立することも生じる。

年代的根拠がある後期旧石器時代以前の石器群もまた正確な資料判断が必要である。これは文献資料の校訂本が成立する過程に準ずる。一例を出せば、4万年前の石器群とされている福井洞穴遺跡第15層の石器群がある。報告書(鈴木・芹沢 1967)によると0層から15層まで地層が分類されている。1次調査のC14年代はウイスコンシン大学に4層、12層、9層が出され、それぞれ14,000年±400 B. P.、10,700±300 B. P.、13,130年±600 B. P.であり、年代は地層の順を示す結果ではなかった。2・3次調査では学習院大学に出され、2層、3層、7層、15層が測定さ

れている。それぞれ12,400年±350 B. P. (G a k -949)、12,700年±500 B. P. (G a k -950)、13,600年±600 B. P. (G a k -951)、>31,900年 B. P. (G a k -952)と地層の順序と符合するようにその年代が出されている。『日本の洞窟遺跡』ではG a k -952の年代は「30,000年より古いものが測定できないため、40,000年に近い年代が与えられるべきかもしれない」と述べられている。この一点から福井15層の遺物は4万年以前との年代が与えられ、比較的多くの旧石器研究者がこのことについて無批判である。少なくともウイスコンシン大学がまちがっていて、学習院大学が正しいと言う根拠は報文からはわからない。ウイスコンシン大学の結果が正しいと考えるのであれば、炭は古いものが混入したと考えられる。火床のように火を焚いた遺構が残されているのであれば、生活面との同時期性が主張できるが、炭粒などの場合は混入や、攪乱が想定できる。特に洞窟や岩陰遺跡は繰り返し居住地として利用されたため、土を掘り返したり動かすなどの行為が行われていたことは、ヨーロッパなどの研究からわかってきている。地層には常に古い遺物が混ざる環境下にあったものと考えられる。15層の年代は>31,900年 B. P. としか出ていない、3.2万年前でも10万年前でも可能性は等しくある。この資料を4万年前であるとした点については、C14年代に使われた炭化物が包含されていた石器と同時代で、なおかつ31,900年以前と言う前提から4万年前と想定すればと言うほとんど根拠のない前提の基に成立している。このようなあやふやな資料は日本に前・中期旧石器が存在したことを示す基準資料としての任を持たない。希望的な解釈の積み重ねによって偽史が形作られることは歴史上見られることである。研究の定点としての基準資料がはっきりしない今、不明であることは不明であるとして課題としておくことも必要である。長山靖生氏は前・中期旧石器捏造事件に関して京都新聞平成14年6月4日夕刊で次のように述べている、「研究者は誰でも自分なりの仮説(学問的ロマン)を胸に抱いている。それがなければ、地道な研究などできない。だが、だからこそ研究者は、自分の願望に自覚的でなければならない。ロマンを欺瞞の礎石にしてはならないのだ」。

4. 討論の場の形成と役割

旧石器時代研究のみならず考古学の研究においては多くの場合、公開の場で徹底的な議論が行われる場合は少ない。議論下手な日本人の体質からか、公の場での反対意見を聞くことを嫌う傾向がある。自説への疑問が出されたことが、人格への攻撃と同意義になる人が多い。また、公の場で論争することは大人気ない、私の言いたいことはわかっているはずだからと言った理由で反論をしない人もいる。本来、討論の場は、2人の問題ではなくそれを取り巻く人々との関係で成り立つ。たとえパフォーマンスと考えられても、問題点を明確に演じ出すことも必要な行為である。

地域に根ざした研究会などの場合、内部処理的な解決がなされる場合もある。一つの発掘調査の結果について疑念があり、それが明らかな場合は“みんな”わかっているのだから、恥をかかせる必要はないと言った解決方法である。人の立場を重視し事実関係を軽視するいわゆるムラの解決の方法である。報告書を頼りにその地方に行くと、「その報告書はおかしなところがあるから、使わないほうがいいよ」などの言葉が多くの人から返ってくる場合もある。このような報告

書を引用した場合、現地に行かないからだという意見を聞く。はたしてそうであろうか。周辺にいる人間は、おかしいと思ったことを表明する義務がある。昭和25年に文化財保護法が施行されて以後、埋蔵文化財に従事する職員が増えてきたが、その初期の人たちが定年を迎えてきており、いわゆる団塊の世代の定年もこの10年でやってくる。村中の思考とは、事情通の“私”がそこにいるということが前提となって成立しているが、20年も経てば現実にはそこにはいないのである。これからは高度成長時代のような大規模な発掘調査が行われることが少なくなってくることは想像に難くない。こうした中、遺物については資料批判が可能であるが、発掘の状況などについては書いたもののみを頼りにしなければいけない。

考古学が真の学問となるためには“私”がそこにいなくなっても成立することが肝要である。そのためにも同時代に生きた別の“私”が、疑念について語り記録に残すことが必要なのである。

「無垢の喪失」(D. Clarke 1973)という論文が出されて約30年経つが、旧石器時代の研究は他の時期よりも多く自然科学者との連携が必要とされる。発掘資料はそれだけで歴史を語る部分は限られていることから解釈が行われる。学問の有効性はその反証可能性にある。自分の考え方にある前提を明らかにすることと考えてもよいだろう。そうした条件下において、正という事である。つまりは反証の可能性が残されていない解釈は学問ではなく、宗教に近いものである。真の意味での学問の連携は、自然科学者と同じ価値体系の中で論議していくことが必要である。もちろん考古学的な基礎的な資料操作や検討が十分為された上ではあるが。

5. まとめ

今回の捏造事件は各方面に多大な迷惑をかけることになった。教育においては教科書に用いられ学生たちに誤った知識を教え、普及啓発においても国民に誤った事実を伝えることになった。

また、緊急発掘調査の最前線で民間の開発者との折衝にあたる自治体職員等にも多くの迷惑をかけている。こうした中、あいまいな資料を悪い意味での“文系的な”前提なしの奔放な解釈による論考を許してくれるほど、国民や他の時代を研究する仲間たちは寛容ではないということを経験しなければならぬ。十分に吟味された調査成果を簡単な言葉で人に伝えることが必要であり、考古学という学問の信頼を回復することだと思われる。そのためにも報告書の刊行と、資料の公開が自由な論議をし、調査成果のクロスチェックをするためにも不可欠であると考えられる。

本文は、こうした状況下研究していく方向性と課題について自戒の念をこめ述べた。これからの旧石器研究者の資料批判を伴う地道な研究こそが信頼回復の捷徑である。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第2係調査員)

参考文献

赤澤威・小田静夫・山中一郎 1980『日本の旧石器』(立風書房)

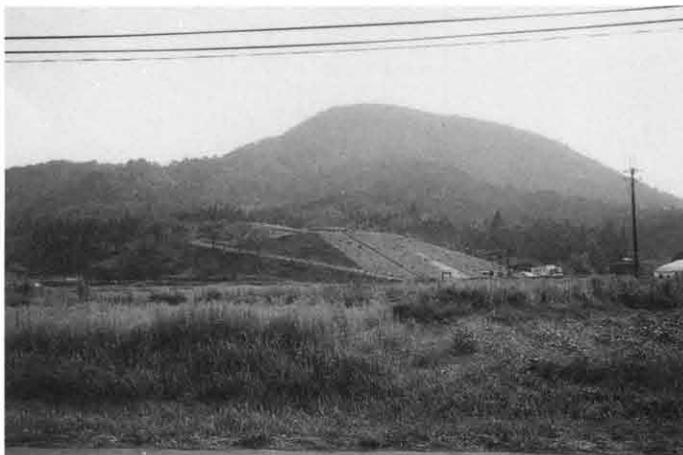
小野昭 1969『『前期旧石器』時代研究の方向性と問題—『星野遺跡(第2次)』・『加生沢遺跡』・『丹生遺跡(綜括篇)』発掘調査報告—』(『考古学研究』第16巻第1号) pp.74~85

- 川崎保 2002「考古学の危機の突破」(ボロンテホームページ(<http://www.volonte93.com>))
- 杉原荘介・芹沢長介・渡辺直径ほか 1977『シンポジウム 日本旧石器時代の考古学』(学生社)
- 鎌木義昌・芹沢長介 1967「長崎県福井洞穴」(『日本の洞窟遺跡』平凡社)
- 竹岡俊樹 1989『石器研究法』(言叢社)
- 竹岡俊樹 1998「『前期旧石器』とはどのような石器か」(『旧石器考古学』56 旧石器文化談話会) pp.15~28
- 中川和哉 2001「九州の前期・中期旧石器時代について—斜軸尖頭器とはどのような石器なのか—」(『旧石器考古学』62) pp.51~61
- 日本考古学協会 2002『日本考古学協会 前・中期旧石器問題調査研究特別委員会報告(Ⅱ)—2001前・中期旧石器問題調査研究特別委員会活動報告(予稿集)』
- 山中一郎 1979「技術形態学と機能形態学」(『考古学ジャーナル』No167) pp.13~15
- 山中一郎 1994『石器研究のダイナミズム』(大阪文化研究会)
- CLARKE, D.L. 1973. Archaeology: the loss of innocence. ANTIQITY, X V VII.
- M. -L. Inizan, H. Roche & J. Tixier、大沼克彦・西秋良宏・鈴木美保訳 1998『石器研究入門』(クバプロ)

府内遺跡紹介

93. ^{しおだに}塩谷古墳群

京都府船井郡丹波町は、南北に長い京都府の中央部、丹波高地と呼ばれる隆起準平地帯に位置している。今回紹介する塩谷古墳群は、同町曾根の丘陵稜線上および丘陵腹部に営まれた、円墳12基からなる古墳群である。平成元年に土取り工事に先立って発掘調査が実施され、木棺直葬を内部主体とする径10m前後の円墳が、墳丘裾部を接するように近接して営まれていることが判明した。墳丘および主体部から、埴輪・須恵器・土師器・鉄器などの遺物が見いだされた。盟主墳とみられるのは5号墳で、径約16mの墳丘の外周部に円筒埴輪を立てめぐらし、墳頂部には2



第1図 東からみた塩谷古墳群
(塩谷古墳公園として整備されている)



第2図 塩谷古墳群整備状況
(手前から3・4・5号墳)

個体の巫女形埴輪が立てられていたことが知られている。

古墳群が形成された年代については、最も眺望の利く位置に築かれた5号墳を嚆矢とし、それを取り囲むようにして、11基の古墳が継起的に営まれたものと考えられている。出土した須恵器の型式から見て、最初に築かれた5号墳で5世紀末葉頃、最後に築かれた11号墳で6世紀中葉頃にそれぞれ築造年代を求めることができる。

塩谷古墳群が所在する丘陵の眼下の平地には、横穴式石室を内部主体とする宮の浦古墳群(7基)・深志野古墳群(8基)が存在する。塩谷古墳群と宮の浦・深志野古墳群は、その位置関係や主体部構造の相違などから見て、塩谷古墳群、宮の浦・深志野古墳群の順に連続的に造営されたものと考えられる。

すなわち、塩谷・宮の浦・深志野

古墳群が近接して営まれた付近一帯は、古墳時代中期から後期末に至る約2世紀の間、この地方を開発し支配した地方首長とその一族の墳墓地であったことが明らかとなった。

平成元年9月に調査を終了した塩谷古墳群は、丘陵の先端部にあった1号墳については土取り工事の対象となり消滅してしまったものの、そのほかの古墳については、古墳公園として整備され、保存されている。かつて1号墳があった丘陵先端部については、遊歩道・説明板・駐車場・公衆便所等の施設が設置され、見学者の利用に供されている。なお、出土した巫女形埴輪については京都府の文化財として、古墳群については丹波町の文化財としてそれぞれ指定され、保存・活用されている。

京都府南部から自動車を駆使して現地へ至るには、国道9号線または京都縦貫道を北上して丹波町に入り、須知の交差点で左折、府道444号を西へとる。約300m進むとなだらかな峠道となり、この峠を越えてさらに500mほど進むと谷水田の左手前方に塩谷古墳群を整備した古墳公園が見えてくる。入口には塩谷古墳公園と書かれた看板が立っているので、その三差路を左折して現地に至る。三差路の手前右手の水田の中には、宮の浦1号墳があり、左片袖式の横穴式石室が開口している。合わせて見学されることを、おすすめする。

(奥村清一郎)



第3図 塩谷5号墳の墳丘と巫女形埴輪
(現地説明会での展示風景、平成元年8月25日)



第4図 南からみた宮の浦1号墳
(横穴式石室の開口部がみえる)



第5図 宮の浦1号墳の横穴式石室

長岡京跡調査だより・83

前回以降の長岡京連絡協議会は、平成14年8月21日・9月25日・10月23日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内3件、左京域4件、右京域11件であった。京域外の7件を併せると、合計25件となる。

調査地一覧表(2002年10月末現在)

番号	調査回数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第415次	7ANBUK-3	向日市寺戸町梅ノ木5-1	(財)向日市埋文	7/30~8/26
2	宮内第416次	7ANBHG-2	向日市寺戸町東野辺4-1他	(財)向日市埋文	7/29~8/30
3	宮内第417次	7ANEIN-3	向日市鶏冠井町稲葉22-25	(財)向日市埋文	9/17~9/26
4	左京第473次	7ANEUK-4	向日市鶏冠井町馬司1番地	(財)向日市埋文	6/17~12/20
5	左京第474次	7ANFGT-2	向日市上植野町後藤14-1他	(財)向日市埋文	6/19~7/19
6	左京第475次	7ANDND-6	向日市森本町野田1-1	(財)向日市埋文	6/24~7/24
7	左京第476次	7ANMOB-2	長岡京市神足落述1他	(財)長岡京市埋文	9/18~10/11
8	右京第735次	7ANSSR-8	大山崎町字円明寺小字里後14-1他	大山崎町教委	4/30~8/9
9	右京第740次	7ANINC-14	長岡京市今里二丁目232他	(財)長岡京市埋文	6/10~9/17
10	右京第742次	7ANKST-13	長岡京市開田三丁目202-1他	(財)長岡京市埋文	7/25~8/7
11	右京第743次	7ANQMK-3	長岡京市久貝二丁目305、812	(財)長岡京市埋文	7/29~8/14
12	右京第744次	7ANQSE-6	長岡京市久貝二丁目113-6他	(財)長岡京市埋文	8/19~8/23
13	右京第745次	7ANMDB-7	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	8/19~9/24
14	右京第746次	7ANUDC-2	京都市西京区大原野石見町地内	(財)京都市埋文研	8/26~
15	右京第747次	7ANMHK-6	長岡京市神足三丁目311-3	(財)長岡京市埋文	9/4~10/7
16	右京第748次	7ANMSL-7、 MWY-8	長岡京市東神足一丁目地内	(財)長岡京市埋文	10/1~10/22
17	右京第749次	7ANGNC-4	長岡京市井ノ内西ノ口18-1	(財)長岡京市埋文	10/7~12/10
18	右京第751次	7ANKSM-10	長岡京市開田二丁目地内	(財)長岡京市埋文	10/22~11/30
19	久々相遺跡第9次	7ANBKG-5	向日市寺戸町久々相20-9他	(財)向日市埋文	8/26~9/13
20	物集女城跡第8次・ 中海道遺跡第60次	9ZMANY-8・ 3NNANK-60	向日市物集女町中条22番地	(財)向日市埋文	8/6~9/12

21	物集女城跡第9次・ 中海道遺跡第61次	9ZMANY-9・ 3NNANK-61	向日市物集女町中条23-1・23-4	(財)向日市埋文	9/18～11/15
22	向日市立会 第02044次	7ANFKZ	向日市上植野町北小路28-11他	(財)向日市埋文	6/12～6/13
23	走田古墳群第4次	4PHPON-2	長岡京市奥海印寺奥ノ院24他	(財)長岡京市埋文	9/2～9/13
24	大山崎町第48次遺跡 確認調査	7YYMSIB	大山崎町字円明寺小字稲葉4-1 他	大山崎町教委	6/24～9/30
25	大山崎町第49次遺跡 確認調査	7YYMSHK	大山崎町字円明寺小字開キ3 番地外	大山崎町教委	7/22～9/13

長岡京跡発掘調査抄報

宮内 第415次の調査では、明治4(1871)年に行われたとみられる真言密教系の地鎮跡が発見された。方形の土坑に4枚の土師質の皿が、上から蓋一身一蓋一身と重ねられ、上側の組の中には稲粳2粒が入っていただけであるが、下側の組には稲粳がぎっしり詰まっており、2枚の皿には、墨で内面には輪宝、外面には偈頌が記されていた。

左京域 第473次の調査では、東二坊大路と二条条間大路の交差点が確認され、道路の規模や構造、側溝の交差状況、さらに地盤改良についても知見が得られた。長岡京時代の墨書土器・緑釉陶器・瓦・帯金具・鉄釘・銭貨など多種多様な遺物が出土し、付近の宅地は役所ではなかったかと考えられている。

右京域 第735次・久保川遺跡の調査では、8世紀中頃から9世紀の庭園跡が検出された。この庭園は、少なくとも1,600㎡を越える規模で、貴族の別荘(別業)の存在を示すとみられている。

第746次の調査は、右京一条四坊十三・十四町という、従来知見の少ない京の北西角近くで行われている。ここからは向日丘陵に阻まれて宮域はまったく望めない。ところが現在の石見町の集落に近づいた地点では、遺構検出段階で正方位に並ぶ柱穴跡などが見つかると、長岡京期の遺物も多数あるので、今後の成果が期待される場所である。

京域外 物集女城跡第8次調査では、16世紀前半～中葉を下限とする建物群が検出された。礎石建物跡もあり、城郭の復原上貴重な成果となった。

走田古墳群の調査では、海成粘土に埋まった牡蠣礁が見つかり、およそ100万年前には大阪湾がこの辺りまで及んでいたことがわかった。

なお、本誌第84号の「長岡京跡調査だより」で報告した中山修一記念館(電話：075-957-7176)が9月1日に開館した。

(小山雅人)

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

(平成14年10月1日現在)

理事長

樋口 隆康
(京都大学名誉教授)

副理事長

川上 貢
(京都府文化財保護審議会会長職務代理・
京都大学名誉教授)

常務理事

中谷 雅治

理事

上田 正昭
(京都府文化財保護審議会会長・京都大学名誉
教授)

藤井 学
(奈良大学学長・京都府立大学名誉教授)

中尾 芳治
(帝塚山学院大学文学部教授)

井上 満郎
(京都産業大学文化学部教授)

都出比呂志
(大阪大学大学院文学研究科教授)

高橋 誠一
(関西大学文学部教授)

増田富士夫
(京都大学大学院理学研究科教授)

三品 廣実
(京都府府民労働部文化芸術室長)

太田 信之
(京都府教育庁指導部長)

杉原 和雄
(京都府教育庁指導部理事文化財保護課長
事務取扱)

監事

小石原範和
(京都府出納管理局長)

安西 信隆
(京都府監査委員事務局長)

事務局長

総務課

課長

総務係長

主任

専門調査員

調査

第1課

主事

課長

課長補佐

企画係長

主査調査員

資料係長

主任調査員

調査

第2課

課長

総括調査員

課長補佐

調査第1係長

主任調査員

専門調査員

調査員

調査第2係長

主任調査員

専門調査員

調査員

調査第3係長

主任調査員

専門調査員

調査員

中谷 雅治

安田 正人

杉江 昌乃

今村 正寿

橋本 清一

(府立山城郷土資料館へ派遣)

鍋田 幸世 鈴木 直人

久保 哲正

水谷 壽克

水谷 壽克(兼)

伊賀 高弘

辻本 和美

田中 彰

長谷川 達

小山 雅人

奥村清一郎

石井 清司

引原 茂治 戸原 和人

田代 弘

石尾 政信

石崎 善久 藤井 整

村田 和弘

伊野 近富

松井 忠春 竹原 一彦

小池 寛 森島 康雄

黒坪 一樹

中川 和哉 筒井 崇史

奥村清一郎(兼)

増田 孝彦 岩松 保

竹井 治雄 岡崎 研一

中村 周平 柴 暁彦

野島 永 高野 陽子

センターの動向(02.08～10)

1. できごと

8. 7 山田黒田遺跡(野田川町)発掘調査開始
- 9 都出比呂志理事、下植野南遺跡出土資料視察
野条遺跡(八木町)発掘調査終了(5.21～)
- 12 内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査終了(～6.19)
宮本長二郎東北芸術工科大学教授、下植野南遺跡出土埴輪指導
- 15 第19回小さな展覧会開催(於：向日市文化資料館、～8.31)
- 19 新堂池古墳群(園部町)発掘調査開始
- 21 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 23 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主催者会議(於：向日市)久保哲正調査第1課長、小山雅人調査第2課総括調査員出席
- 24 第94回埋蔵文化財セミナー(於：向日市民会館)
- 28 理事協議会(於：当センター)樋口隆康理事長、川上貢副理事長、中谷雅治常務理事・事務局長、上田正昭、井上満郎、都出比呂志、高橋誠一、増田富士雄、太田信之各理事出席、第19回小さな展覧会視察
- 29 東原遺跡(八幡市)発掘調査終了(7.22～)
- 31 小さな展覧会終了(8.15～)
9. 1 長岡京市立中山修一記念館開館式(於：長岡京市)中谷雅治常務理事出席
- 3 山田黒田遺跡、発掘調査終了(8.7～)
- 5 杉原和雄理事、センター南部調査現地視察
- 10 福知山城跡(福知山市)発掘調査開始
中尾芳治理事、椋ノ木遺跡(精華町)現地視察
- 12 杉原和雄理事、センター北部調査現地視察
木橋北遺跡(弥栄町)発掘調査開始
- 17 職員研修(於：当センター)講師：中川和哉調査員「石器石材の産状と流通」
- 18 大垣・一の宮遺跡(宮津市)発掘調査開始
- 19 二又・三山木遺跡(京田辺市)現地説明会
- 19～20 埋蔵文化財担当職員等講習会(於：大阪市)長谷川達調査第2課長、田中彰主任調査員、増田孝彦主任調査員出席
- 20 太田遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 25 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 27 二又遺跡、発掘調査終了(～5.20)
赤ヶ平遺跡(木津町)関係者説明
- 30 退職職員辞令交付式

10. 1 異動職員辞令交付式
10 赤ヶ平遺跡(木津町)発掘調査終了(7.3～)
11 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：京都市埋蔵文化財研究所)久保哲正調査第1課長、辻本和美資料係長出席
15 野条遺跡(亀岡市)発掘調査終了(～5.21)
中谷雅治常務理事・事務局長、大淵遺跡(亀岡市)現地視察
16 棕ノ木遺跡(精華町)現地説明会
17～18 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：金沢市)伊野近富調査第2課調査第2係長、今村正寿総務課主任、鈴木直人総務課主事出席
22 竹野遺跡(丹後町)発掘調査開始
23 長岡京連絡協議会(於：当センター)
京都府立山城郷土資料館開館20周年記念特別展開会式(於：山城町)中谷雅治常務理事・事務局長出席
福知山城跡(福知山市)関係者説明会
24 大淵遺跡(亀岡市)現地説明会
28 平安京跡(山城高校)(京都市)発掘調査開始
片山古墳群(木津町)発掘調査開始
奥田尚奈良県立橿原考古学研究所

非常勤研究員、佐山・市田齊当坊遺跡出土土器指導

- 29 長岡京跡・神足遺跡(長岡京市)発掘調査開始

- 30 福知山城跡、発掘調査終了(9.10～)

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋文研修会(於：枚方市)竹原一彦主任調査員、岡崎研一専門調査員、中村周平・村田和弘調査員出席

- 31～11.1 全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ等研究委員会(於：茨城県大洗町)辻本和美資料係長出席

2. 普及啓発事業

8. 24 第94回埋蔵文化財セミナー(於：向日市民会館)『平成13年度京都府内発掘調査成果から』：岩松保当センター主任調査員「荒坂横穴群の構造から見た葬送儀礼」、河野一隆当センター調査員「棕ノ木遺跡の調査から復原する中世農村」、森島康雄当センター主任調査員「金箔瓦が語る秀吉時代の京都」

3. 人事異動

9. 30 河野一隆調査員退職

お詫びと訂正

前号(情報85号)掲載の柴暁彦論考中において図面作成者の氏名の記載もれがありましたので、訂正しお詫び申し上げます。

3頁 第4図 京都盆地縄文時代(晚期中葉～後葉)遺跡分布図

5頁 第6図 南山城の縄文時代(晚期中葉～後葉)土器

上記の2図面につきましては、近藤奈央氏(立命館大学大学院)の作成図面です。

ご面倒ですが、今号に同封しましたシールを貼っていただきますようお願いいたします。

受贈図書一覧(02.08~10)

(財)北海道埋蔵文化財センター

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第165集 山崎5遺跡、同第166集 山越3遺跡・山越4遺跡、同第167集 野田生2遺跡、同第168集 宮戸4遺跡、同第169集 白滝遺跡群Ⅲ、同第170集 穂香堅穴群、同第171集 野田生4遺跡、同第172集 虎杖浜2遺跡(2)、同第173集 チブニー1遺跡・チブニー2遺跡、同第174集 ケネフチ9遺跡、同第175集 栄浜1遺跡、同第176集 ユカンボシC15遺跡(5)、同第177集 対雁2遺跡(3)、調査年報14 平成13年度、北海道立埋蔵文化財センター年報3

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査報告書第313集 隈無(8)、同第323集 上野尻遺跡Ⅲ、同第326集 畑内遺跡Ⅷ

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第371集 河崎の柵擬定地発掘調査報告書、同第372集 矢崎I遺跡発掘調査報告書、同第373集 大清水遺跡発掘調査報告書、同第374集 古館遺跡発掘調査報告書、同第375集 上村遺跡発掘調査報告書、同第376集 米沢遺跡発掘調査報告書、同第377集 熊堂B遺跡第10次発掘調査報告書、同第378集 金館跡発掘調査報告書、同第379集 上似内遺跡発掘調査報告書、同第380集 中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書、同第381集 本宿向畑遺跡発掘調査報告書、同第382集 清水遺跡発掘調査報告書、同第383集 里遺跡発掘調査報告書、同第384集 権現前遺跡発掘調査報告書、同第385集 船丸館跡発掘調査報告書、同第386集 要害館跡発掘調査報告書、同第387集 大向II遺跡発掘調査報告書、同第388集 長興寺I遺跡発掘調査報告書、同第389集 野尻Ⅲ遺跡発掘調査報告書、同第390集 山根館跡発掘調査報告書、同第391集 上水沢II遺跡発掘調査報告書、同第392集 小松II遺跡発掘調査報告書、同第393集 飯岡才川遺跡第3次発掘調査報告書、同第394集 諏訪前遺跡発掘調査報告書、同第395集 北田II遺跡発掘調査報告書、同第396集 沢田2遺跡発掘調査報告書、同第397集 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報、紀要XXI

(財)福島市振興公社文化財調査室

福島市埋蔵文化財報告書第95集 月崎A遺跡、

同第131集 勝口前畑遺跡10、同第132集 勝口前畑遺跡11、同第134集 椿館跡、同第135集 名倉城跡・北橋遺跡、同第136集 小倉向A遺跡、同第137集 戸上向遺跡・八方塚B遺跡、同第138集 割石遺跡(試掘調査)、同第139集 平成11年度遺跡詳細分布調査報告(試掘調査)、同第140集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査概要Ⅸ、同第142集 大枝館跡・入トンキヤラ遺跡、同第143集 地蔵原遺跡、同第144集 番匠内遺跡2・観音山古墳群、同第145集 鎧塚遺跡2、同第146集 反町B遺跡、同第147集 腰浜遺跡、同第148集 増田条里制遺構、同第149集 平成12年度遺跡詳細分布調査報告(試掘調査)、同第150集 平成12年度市内遺跡試掘調査報告、同第151集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査概要Ⅹ、同第152集 羽根通A遺跡、同第153集 ニツ石遺跡、同第154集 ニツ石遺跡2、同第155集 小峯遺跡、同第156集 地蔵原遺跡2、同第157集 台畑遺跡3、同第158集 平成13年度市内遺跡試掘調査報告(試掘調査)、同第159集 平成13年度市内遺跡詳細分布調査報告(試掘調査)、同第160集 五十辺遺跡2・五十目館跡

(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団

鹿嶋市の文化財第93集 鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告XV、同第112集 鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告XVIII、同第113集 鹿嶋市内遺跡発掘調査報告書23

(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

栃木県埋蔵文化財調査報告第252集 北の前遺跡、同第262集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報24、同第263集 大野遺跡・大用地B遺跡、同第265集 東谷・中島地区遺跡群2、同第266集 長田浅間塚、同第267集 板倉中妻居館跡、年報第12号、研究紀要第10号

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第225集 勝島川端遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡、同第270集 馬場東矢次II遺跡・新川鑄木遺跡・井手二子山古墳・保渡田八幡古墳、同第298集 中内村前遺跡(1)、同第301集 白井大宮II遺跡

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第272集 向原遺跡II、同第273集 川越城/小在家II、

同第274集 成願遺跡、同第275集 堀東遺跡Ⅱ、同第276集 如意Ⅲ／川端、同第277集 稻荷前遺跡B地区Ⅱ、同第278集 北島遺跡Ⅴ、同第279集 熊谷遺跡、同第280集 大寄遺跡Ⅱ、同第281集 八木崎遺跡、年報22、研究紀要第17号
(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

研究論集XⅨ、要覧平成14年度、東京都埋蔵文化財センター調査報告第113集 尾張藩上屋敷跡遺跡発掘調査報告書Ⅸ、同第114集 尾張藩上屋敷跡遺跡発掘調査報告書Ⅹ、同第119集 尾張藩上屋敷跡遺跡発掘調査報告書ⅩⅠ、同第120集 お茶の水貝塚

(財)かながわ考古学財団

かながわ考古学財団調査報告131 稲荷塚貝塚、同136 比奈窪中屋敷横穴墓群、研究紀要7

(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告31 八幡山遺跡

(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

紀要9、年報17、同18

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 寺地遺跡、同第115集 蔵ノ坪遺跡

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第16集 能越自動車道貫連埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告、紀要第5号、埋蔵文化財年報(13)、埋蔵文化財調査概要平成13年度、中山中遺跡発掘調査レポート

富山県埋蔵文化財センター

年報平成12年度、生と死の祈り、子供考古学ラボ2002

(財)石川県埋蔵文化財センター

七尾市千野古墳群調査報告書、漆町遺跡Ⅲ、木ノ新保遺跡、戸水B遺跡Ⅱ、藤江C遺跡Ⅳ・Ⅴ、藤江C遺跡Ⅶ、経王寺遺跡、橋爪ガンノアナ遺跡・橋爪B遺跡、一針B遺跡・一針C遺跡、猫橋遺跡、指江遺跡・指江B地区、中島ヤマタン25号墳

(財)岐阜県文化財保護センター

年報2

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第24集 内田町遺跡、同第25集 塩草B窯跡、同第26集 川合K窯跡、同第27集 小長曾陶器窯跡、研究紀要第10輯

(財)大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第68集 河原城遺跡Ⅱ、同第69集 丹上遺跡・真福寺遺跡、同第74集 大坂城跡Ⅱ、同第75集 亀川遺跡、同第77集 讚良郡条里遺跡・小路遺跡・打上遺跡・茄子作遺跡・藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群・長尾東地区、同第80集 宿久庄西遺、大阪府埋蔵文化財研究会(第45回)資料、研究調査報告 第3集

(財)大阪市文化財協会

大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1999・2000年度

(財)八尾市文化財調査研究会

平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告、(財)八尾市文化財調査研究会報告70～73

(財)元興寺文化財研究所

元興寺、研究報告2001

(財)鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県教育文化財団調査報告書74 青谷上寺地遺跡4、同75 小幡古墳群、同76 高福大將軍遺跡、同77 茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡、同78 古市遺跡群3、同79 坪田遺跡、年報2001

(財)鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター

平成13(2001)年度古市遺跡・秋里遺跡・里仁第3横穴群・桂見古墳群・倭文所在遺跡1・本高段木遺跡・山ヶ鼻遺跡・久末・古都家遺跡、横枕古墳群Ⅰ、円護寺古墳群、下味野古墳群Ⅰ

鳥根県埋蔵文化財調査センター

白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡・堀田ヶ谷遺跡・地藏院遺跡・熊谷遺跡、堤平遺跡、上野Ⅱ遺跡、馬場遺跡、田中谷遺跡・塚山古墳・下り松遺跡・角谷遺跡、馬場遺跡・杉ヶ撓遺跡、客山墳墓群・連行遺跡、屋敷古墳群・鋤崎古墳群・足頭古墳群・長廻古墳群・杓子観音Ⅰ古墳群・杓子観音Ⅱ遺跡、東船遺跡、御崎谷Ⅱ遺跡、古志本郷遺跡Ⅳ・放れ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡、檀原遺跡(2)、下山遺跡(2)、神原Ⅱ遺跡、小丸遺跡、殿淵山遺跡・獅子谷遺跡(1)、貝谷遺跡、風土記の丘地内遺跡財発掘調査報告書13 来美廃寺、鳥根県遺跡地図Ⅱ(石見編)、石見銀山 龍昌寺跡、加茂岩倉遺跡、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅹ、荒神谷遺跡／加茂岩倉遺跡、鳥根県古代文化センター調査研究報告書12 青銅器埋納地調査報告書Ⅰ

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

年報18 平成13年度

(財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター

文化財センター調査報告書第24冊 西本2、3・4、5号遺跡、同第30冊 史跡安芸国分寺

跡発掘調査報告書Ⅲ、同第31冊 土居遺跡発掘調査報告書、同第35冊 岡城跡発掘調査報告書、同第36冊 史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅳ
山口県埋蔵文化財センター

年報平成13年度 陶垣

(財)徳島県埋蔵文化財センター

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第38集 土井遺跡、同第39集 吉水遺跡、同第40集 観音寺遺跡Ⅰ

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

岡清水遺跡、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十七冊 中間西井坪遺跡Ⅲ、同第三十八冊 川津東山田遺跡Ⅰ区、同第三十九冊 原間遺跡、同第四十冊 坪井遺跡、同第四十一冊 川津東山田遺跡Ⅱ区、空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 空港跡地遺跡Ⅴ、高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊 鴨部・川田遺跡Ⅲ、サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 西打遺跡Ⅱ、同第3冊 高松城跡(西の丸地区)Ⅰ、国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成13年度、県道関係埋蔵文化財発掘調査概報平成13年度、浜ノ町遺跡、西末則遺跡、高松城跡(丸の内地区)、年報平成13年度、埋蔵文化財試掘調査報告ⅩⅤ、香川県中世城館跡詳細分布調査概報平成13年度、香川県埋蔵文化財調査年報平成12年度

(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
伊豫の鏡、松山市文化財調査報告書第87集 樽味四反地遺跡

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

年報第10号、同第11号、田村遺跡群発掘調査概報、高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集 奥谷南遺跡Ⅲ、同第64集 林口遺跡Ⅱ・蓮池城跡北面遺跡、同第65集 中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ、同第66集 居徳遺跡群Ⅱ、同第67集 中屋敷遺跡、同第68集 北川内遺跡、同第69集 居徳遺跡群Ⅲ、同第70集 中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅠ、同第71集 林田遺跡Ⅰ、同第72集 田村遺跡群・緑の広場調査報告書、同第73集 野田遺跡Ⅰ

千歳市教育委員会

千歳市文化財調査報告書ⅩⅩⅦ ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査、同ⅩⅩⅧ 梅川4遺跡における考古学的調査

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第111集 柳之御所遺跡

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第245集 鍛冶屋敷A遺跡・鍛冶屋敷前遺跡、同第253集 八木山緑町遺跡ほか発掘調査報告書、同第255集 中在家南遺跡(第3・4次)・押口遺跡(第3次)発掘調査報告書、同第258集 郡山遺跡22、同第262集 平成13年度文化財年報23

古川市教育委員会

宮城県古川市文化財調査報告書第27集 名生館官衙遺跡ⅩⅩ、同第30集 名生館官衙遺跡ⅩⅩⅡ・灰塚遺跡

藤沢市教育委員会

藤沢市文化財調査報告書第37集 No.260遺跡(南鍛冶山遺跡)

小田原市教育委員会

小田原市文化財調査報告書第90集 平成11年度試掘調査、同第91集 小八幡東畑遺跡第Ⅲ地点、同第92集 天神下跡第Ⅱ地点、同第93集 小田原城三の丸南堀第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ地点、同第94集 小田原城三の丸東堀第Ⅶ地点、同第95集 箱根口跡第Ⅳ地点、同第96集 香沼屋敷跡第Ⅶ地点、同第97集 大久保雅楽介邸跡第Ⅸ地点、同第98集 池上森通遺跡第Ⅰ地点、同第99集 千代南原遺跡第Ⅷ地点、同第100集 藩校集成館跡第Ⅲ・第Ⅳ地点、同第101集 久野諏訪ノ原遺跡群Ⅰ、同第102集 小船森地区内遺跡、シンポジウム「弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～」

富山市教育委員会

富山市中富居遺跡発掘調査報告書、富山市水橋荒町遺跡発掘調査概要Ⅱ、富山市針原中町Ⅱ遺跡発掘調査概要、富山市水橋清水堂南遺跡、境野新遺跡・向野池遺跡、富山市埋蔵文化財調査報告書107 富山市千原崎遺跡発掘調査報告書、同109 富山市開ヶ丘中山Ⅳ遺跡発掘調査報告書、同110 富山市向野池遺跡発掘調査報告書、同111 富山市茶屋町西山遺跡発掘調査報告書、同112 富山市百塚住吉遺跡発掘調査報告書、同113 富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書、同115 富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書、同116 富山市上布目遺跡発掘調査報告書、同117 富山市御坊山遺跡発掘調査報告書、同119 富山市開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中山Ⅴ遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書、同120 富山市開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書、同121 富山市岩瀬天神遺跡発掘調査報告書、同122 富山市吉岡遺跡・経力遺跡発掘調査報告

書、同124 富山市柘谷南遺跡発掘調査報告書Ⅱ、同132 富山市百塚住吉遺跡発掘調査報告書、紀要第20号、同第21号

小杉町教育委員会

塚越貝坪遺跡・畑総No.15遺跡発掘調査概要、小杉町埋蔵文化財発掘調査一覧1999年度、水蔵場D遺跡発掘調査報告、針原西遺跡発掘調査報告

婦中町教育委員会

千坊山遺跡群試掘調査報告書

松任市教育委員会

松任市野本遺跡Ⅲ、松任市出城城址、松任市宮永B遺跡、松任市乾町三月田遺跡

加賀市教育委員会

加賀市埋蔵文化財報告書36 弓波遺跡、同37 大菅波D遺跡、同38 保賀遺跡

野々市町教育委員会

御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群、下新庄アラチ遺跡、富樫館跡蝮土居地区・富樫館跡鬼ヶ窪地区、末松A遺跡・末松しりわん遺跡、横川・本町遺跡

敦賀市教育委員会

舞崎前山古墳・舞崎遺跡

湖西市教育委員会

湖西の文化 平成10～13年度(第27～30号)、湖西市文化財調査報告第24集 大知波峠廃寺、同第31集 大知波峠廃寺跡Ⅳ、同第32集 大知波峠廃寺跡Ⅴ、同第33集 湖西市文化財地図・地名表、同第34集 大知波峠廃寺跡Ⅵ、同第35集 宇津山城跡、同第36集 豊橋湖西線緊急地方道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、同第39集 太田若磯神社遺跡、同第40集 湖西連峰の信仰遺跡分布調査報告書、大知波峠廃寺跡シンポジウム事業報告書平成7年度、本興寺惣門保存修理工事報告書

浜岡町教育委員会

浜岡町埋蔵文化財調査報告書第9集 南谷遺跡、文化財年報Ⅲ

四日市市教育委員会

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書28 大矢知山畑遺跡、同29 西ヶ谷遺跡3、同30 西ヶ谷遺跡4、四日市市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書XXⅧ 真造寺遺跡・道具林古墳、一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ、四日市市文化財保護年報13

草津市教育委員会

草津市文化財調査報告書43 谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ、同47 中畑遺跡発掘調査報告書Ⅰ

日野町教育委員会

日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 松尾

遺跡・十禅師遺跡・大屋神社・杉杣寺遺跡確認調査、同第17集 西中道遺跡・中甲津遺跡

大阪市教育委員会

大阪の歴史と文化財 第10号

貝塚市教育委員会

近木郷を考古学する、貝塚市の指定文化財—平成9～13年度指定、貝塚市埋蔵文化財調査報告第59集 加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要10、同第60集 津田北遺跡発掘調査概要、同第61集 森下代遺跡発掘調査概要、同第62集 貝塚市遺跡群発掘調査概要24

枚方市教育委員会

枚方市文化財調査報告第38集 枚方市埋蔵文化財発掘調査概要2001

八尾市教育委員会

八尾市埋蔵文化財分布図—平成13年度版、八尾市文化財調査報告46 八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅰ、同47 八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅱ、八尾市立埋蔵文化財センター調査報告3

大阪狭山市教育委員会

大阪狭山市文化財報告書23 平成13年度狭山藩陣屋跡発掘調査報告書、同24 府狭山藩陣屋跡発掘調査概要報告書Ⅲ、同25 大阪狭山市内遺跡群発掘調査報告書12

和泉市教育委員会

和泉市埋蔵文化財発掘調査概報12

和泉市埋蔵文化財調査報告第6集 カニヤ塚古墳発掘調査報告書、府中遺跡01-116地点の発掘調査

泉南市教育委員会

古代史博物館 館報平成13年度

泉南市文化財調査報告書第35集 泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅨ、同第37集 男里遺跡発掘調査報告書、同第38集 大苗代遺跡発掘調査報告書

能勢町教育委員会

能勢町文化財調査報告書第18冊 平成13年度能勢町埋蔵文化財調査概要

島本町教育委員会

島本町文化財調査報告書第3集 山崎東遺跡範囲確認調査概要報告

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

古代但馬の王墓

神戸市教育委員会

平成11年度神戸市埋蔵文化財年報、日輪寺遺跡発掘調査報告書、深江北町遺跡第9次、沢の鶴大石蔵発掘調査報告書、野瀬遺跡、淡河木津遺跡第1次・第2次発掘調査報告書

姫路市教育委員会

特別史跡姫路城跡

佐用郡教育委員会

佐用郡文化財報告書第5集 平成12年度佐用郡埋蔵文化財調査年報

檀原市教育委員会

檀原市埋蔵文化財調査概要19 植山古墳

名和町教育委員会

名和町文化財報告書第29集 坪田遺跡、御来屋小塚原坪田遺跡発掘調査報告書

美作町教育委員会

美作町埋蔵文化財調査報告第1集 大塚5号墳

府中市教育委員会

府中市埋蔵文化財調査報告第12冊 府中市内遺跡6、同第13冊 坊迫遺跡群、同第14冊 矢谷遺跡・古墳群、同第15冊 府中市内遺跡7

善通寺市教育委員会

鉢伏山北東麓遺跡群・菊塚古墳発掘調査報告書、旧練兵場遺跡・四国学院大学構内遺跡・菊塚古墳、旧練兵場遺跡(市営西仙遊町住宅建設)、旧練兵場遺跡(特別養護老人ホーム仙遊荘建替え)

北九州市教育委員会

北九州市文化財調査報告書第89集 長野城、同第93集 立場茶屋銀杏屋、同第94集 先ノ下遺跡第2地点、同第95集 今村清川町遺跡、同第96集 大手町遺跡第3地点

大刀洗町教育委員会

大刀洗町文化財調査報告書第22集 史跡下高橋館衛遺跡周辺遺跡、同第23集 高樋小道遺跡

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第127集 徳永遺跡群Ⅵ、同第128集 徳永遺跡群Ⅶ、同第129集 権現原遺跡、同第130集 増田遺跡群Ⅵ、同第131集 平尾二本松遺跡Ⅰ、同第132集 平尾二本松遺跡Ⅱ、同第133集 石土井遺跡・上九郎遺跡、同第134集 佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書1999年度、同第135集 上和泉遺跡群Ⅱ、同第136集 徳永遺跡群Ⅷ、同第137集 徳永遺跡群Ⅸ、同第138集 徳永遺跡群Ⅹ、同第139集 徳永遺跡群Ⅺ

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書第164集 長崎県埋蔵文化財調査年報9、同第165集 県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅴ、同第166集 森岳城跡、同第167集 玖島城跡、同第168集 千里ヶ浜遺跡、一支国探訪記録集、発掘「倭人伝」

鷹島町教育委員会

鷹島町文化財調査報告書第4集 鷹島海底遺跡

Ⅴ、同第5集 鷹島海底遺跡Ⅵ、同第6集 鷹島海底遺跡Ⅶ

玉名市教育委員会

玉名市文化財調査報告第10集 今見堂遺跡・平町遺跡・蓮華遺跡、同第11集 玉名市内遺跡調査報告書Ⅰ

大分県教育委員会

大分県文化財調査報告書第131輯・久住町文化財調査報告書第10集 仏原千人塚古墳群、同第132輯 利光遺跡、同第133輯 鶴崎御茶屋跡、同第134輯 下野遺跡、同第135輯 毛井遺跡B地区、同第136輯 戸口遺跡、同第137輯 尾崎遺跡・清水遺跡・新田遺跡・川野遺跡・久木小野遺跡・平岩遺跡、同第138輯 西王寺遺跡・毛見所遺跡・上久所遺跡・浄土寺遺跡、同第139輯 小城原遺跡・中原遺跡、同第140輯 弥四郎遺跡・王子遺跡、同第141輯 古庄屋遺跡、同第142輯 山ノ下遺跡、同第143輯 清次郎原遺跡・上ノ原稻荷塚古墳、同第144輯 真萱遺跡群、同第145輯 東大道遺跡B地区、同第146輯 久保田遺跡、同第147輯 真那井城山遺跡、同第148輯 大分の中世城館、寺内遺跡・上野第2遺跡、大分県文化財年報10

日田市教育委員会

日田市埋蔵文化財調査報告書第33集 内ノ下遺跡・大行事遺跡、同第34集 尾部田遺跡、同第35集 後迫遺跡、同第36集 高野条里深野田地区、同第37集 今泉遺跡、平成12年度(2000年度)日田市埋蔵文化財年報

久住町教育委員会

久住町文化財調査報告書第11集 中殿遺跡

都城市教育委員会

都城市文化財調査報告書第46集 久玉遺跡第9次・第10次調査、同第49集 池ノ友遺跡、同第50集 肘穴遺跡(1)・今房遺跡・馬渡遺跡、同第54集 天神遺跡第2次調査・中町遺跡第3次調査、同第58集 江内谷遺跡・坂元B遺跡・加治屋B遺跡

佐土原町教育委員会

佐土原町文化財調査報告書第12集 佐土原城跡Ⅰ、同第16集 尾曲遺跡

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

二又遺跡、木田余台Ⅱ

栃木県立なす風土記の丘資料館

栃木の遺跡

小山市立博物館

乙女の古代瓦と下野国

群馬県立歴史博物館

編集後記

本号では、小誌の基本柱でもある「共同研究」と「研究ノート」の2編を掲載することができました。このうち、共同研究は、当センターの職員が小規模な研究チームを作り、その研究テーマに対して、普及啓発事業の一環として助成を行っているものであります。今回の成果報告は、単に資料収集にとどまらず、さらに深くテーマへの論及が行われた力作です。なにごとも、こだわりが重要。時宜を得た「研究ノート」とともに、よろしくご味読ください。

(編集担当=辻本和美)

京都府埋蔵文化財情報 第86号

平成14年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 (代)